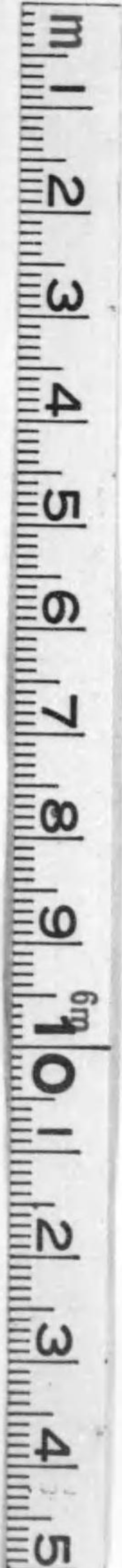




325
508



始





325-508

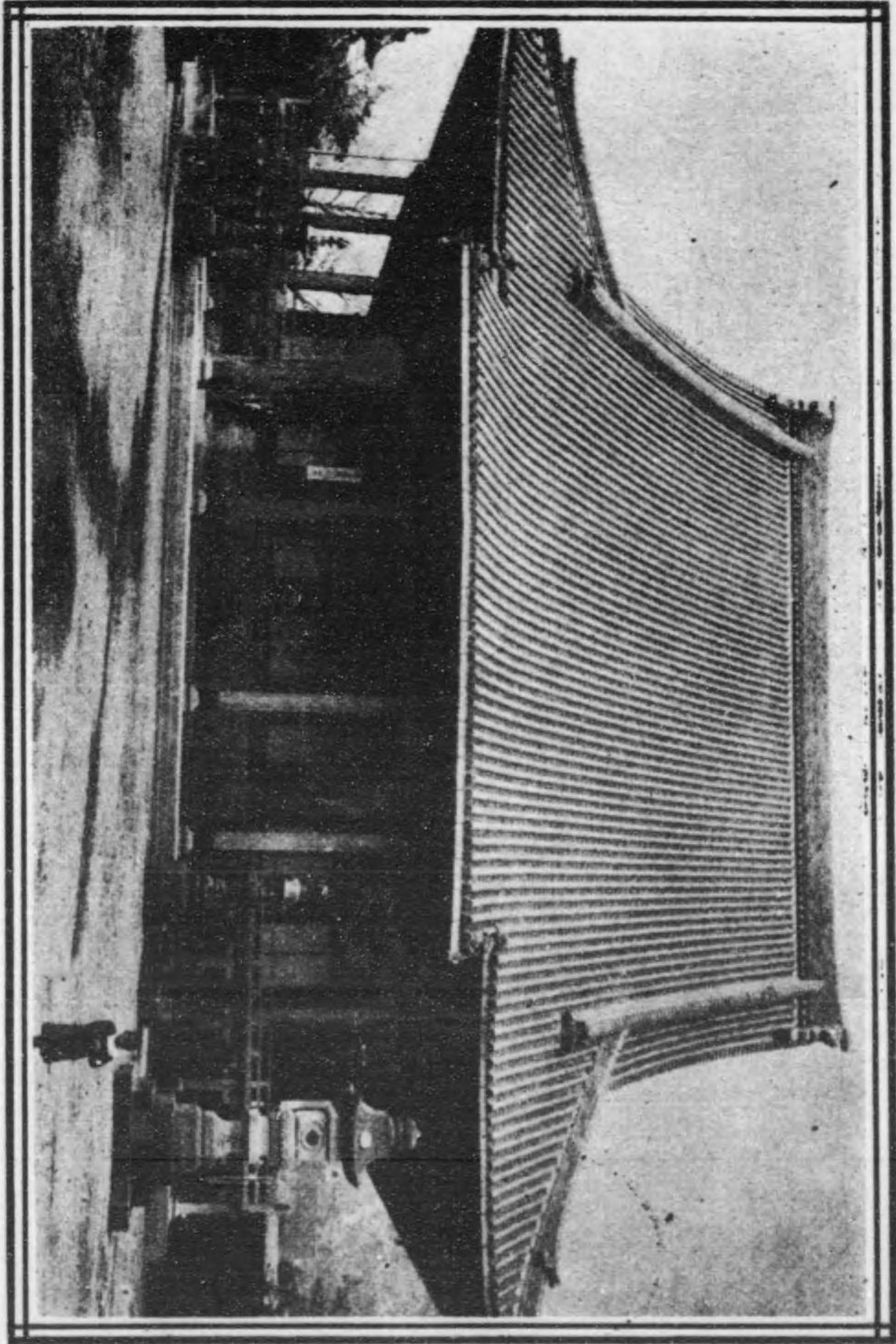
勸學松島善海師題字
勸學檀特教遵師題詩

司教小池普達師序文
文學士井上德命師序文



聖親鸞全

大正
6. 6. 22
内交



院別寺願本西島兒鹿



縣 覽 全

文學士 共 土 勸 命 勸 利 文
 百 姓 小 庶 普 益 補 乳 文

備 學 公 益 善 新 興 興 字

五大
 交内

物
本
友



流
通

善
海
祥
題



二篇奉
門值

見真大師六百五十回諱辰書感

噉肉畜妻自稱愚終身翰影恰如愚博覽強記猶
無學但念佛名伴下愚
但念佛名伴下愚世間誰是及其愚精神一徹不
會變自信教人唯守愚
自信教人唯守愚能導世間愚請看于俗于
真諦慧眼見真果不愚
慧眼見真果不愚一宗開闢度癡愚任他世上毀
譽事噉肉畜妻自稱愚

大正六年二月

奉
值

教
遵

序

宗祖大師六百五十回大御遠忌に値遇セルヲ善ビ報恩ノ經營ニ擬セン爲メ岩尾僧梁氏聖親鸞ナル書ヲ著ス嘆徳ニ云親鸞聖人者淨教西方之先達眞宗末代之明師也ト遺徳廣大法水流遠之ヲ仰ケハ彌高ク之ヲ鑽レハ彌堅シ 大師聖人御一代九十年當時世路艱難弘教開宗亦容易ナラズ生涯ヲ通シテ千辛萬苦ヲ重ネタマフコレ皆興法利生ノ爲メナラサルハナシ所説甚深佛願ヲ盡シテ餘蘊ナク佛教ヲ該シテ漏ル、モノナシ眞俗二諦ハ法門ノ要旨ニシテ眞諦俗諦遞ニ因リテ物ヲ化

ス枯渴ノ凡類齊ク其潤澤ヲ受ケ濁末ノ衆生普ク其化ヲ蒙ル爲妙教流通來生者ノ本旨茲ニ満足ス嗚呼偉ナル哉 祖徳身ヲ粉ニシテモ報スヘク又謝スヘキハ大師ノ洪恩ナリ其行化ノ芳迹奇特筆舌ノ能ク盡スヘキニアラズ著者熱誠編纂ニ從事シ偉徳ヲ鑽仰シ鴻業ヲ讚嘆ス章ヲ立テ項ヲ分チ説テ詳カニ述ヘテ序アリ一讀以テ入信ノ縁ヲ成スヘク再讀以テ祖徳ノ廣大ヲ知ルヲ得ヘシ記シテ以テ序トナス

大正六年二月二十二日

在鹿兒島別院 本願寺司教 小池 普 達

序

世には口の達者なる人もあり、筆の立つ人もあり、されど兩つながら兼ね備へし人は少し。

畏友岩尾僧梁師は口に大悲の慈恩を説いて倦むことなく、筆に宗祖の遺徳を述べて怠ることなし。

こたび本派鹿兒島別院に於て、宗祖大師六百五十回大遠忌親修せらるゝに當り永への記念として。

「聖親鸞」の述作あり、平易俗耳に入りやすき祖師の畧傳なるも、併せて祖師と同化せる師の熱烈なる信仰の告白にして、實に自信教人信の旨にも適ひ、眞成報佛恩の志にも相副ふべきもの、謹んで序す。

井上徳命

「聖親鸞」の巻頭に

自分は、今秋、鹿兒島本願寺別院に於て行はせらるゝ、宗祖大師六百五十年の御遠忌に對する感慨は、一層切にして、起つて、此法要を紀念すべく拙著を公にすることゝした。請ふ。諸君、是を諒とせよ。

自分は、北豊隅の龍泉寺に生れた愚物である。然し、み佛のお蔭で、一實の大道に氣付かして貰ふたは、感謝に堪へぬ次第だが、報恩の事に欠ぐるは、眞に慚愧の極みで、茲に、謹んで懺悔の意を表す。

自分は、明治三十六年鹿兒島縣に入つて已來、南隅、薩南の

「聖親鸞」の巻頭に.....

「聖親覺」の巻頭に……

地をへ巡つて、大正二年二月、當所に駐在して今日に及んだ。
 自信教人信の天爵は戴きながらも、斯道を全うするに難きは、
 寔に申譯なく、せめては責任ある門信徒だけになりと、よし、
 其幾何を傳へようと、人の笑ひをも顧みず、活字に移したので
 ある。有識の士、願はくばこれを恕せよ。
 自分は、筆を執るには餘りに、學才ともに淺きも、幸ひに、
 先輩の指導を蒙りたるを喜び、時折りに感じたる仕合せを書き
 つゞりて、わが有縁の同朋に頒たうと思ふ。
 看る者、その疎漏を咎むな。
 自分は、世に道心家として慕はれたる故無染の命日に草稿を
 了へたと云ふは、自ら、淨刹にある彼に向つて、自己の信念を

「聖親覺」の巻頭に……

告白するやうだ。曾祖父よ、よろしく兒が安全をみそなはせたまへ。
 自分は、是を出版するに際して、陰に陽に御力添へを下され
 し松島、檀特の兩勸學、小池司教、井上文學士、並に藤村信虎
 井上良頼二氏と、併せて、宮内校長諸氏の御厚意の程を。深く
 謝してをく次第である。
 自分は、此企てを故郷に報じた。父津梁は返すに、次の絶句
 を以てしたので、敢て、終りに記すであらう。

「聖親聖」の巻頭に.....

祖 德 讚 仰

大心海化受凡姿。法脈傳來則七師。
開宗何違靈告命。果然千歲萬機滋。

大正六年三月六日

日州西諸縣郡飯野村の寓居にて

龍 家 洞 無 物

謹 白。

聖 親 鸞 目 次

第一章 緒 論

- 一。のべんかな.....一
- 二。かへりみん.....五
- 三。仰げば愈々高し.....七
- 四。淨土の妙境を縮寫して現世の苦痛に克て.....九

第二章 日 野

- 一。都の花.....二
- 二。靈の響.....三
- 三。花に風.....五

第三章 求 道

目 次.....

目次.....

| | | |
|----|----------|----|
| 一。 | 出家..... | 二九 |
| 二。 | 山 狀..... | 三一 |
| 三。 | 參 籠..... | 三六 |
| 四。 | 神 龍..... | 三八 |
| 五。 | 恩 賜..... | 四〇 |
| 六。 | 煩 悶..... | 四三 |

—— 著者の寺歴 ——

第四章 吉 水

| | | |
|----|---------------|----|
| 一。 | 綽空生る..... | 四七 |
| 二。 | 隱遁の志..... | 五一 |
| 三。 | 廢立の實を擧げよ..... | 五三 |
| 四。 | 自力の根底を抜け..... | 五五 |

| | | |
|----|----------------|----|
| 五。 | 家族的宗教起る..... | 六一 |
| 六。 | 選擇集の付屬..... | 六六 |
| 七。 | 行信論と信心一異論..... | 七六 |
| 八。 | 第十八願の天下分目..... | 八〇 |
| 九。 | 争ひの光景..... | 九七 |

第五章 法 難

| | | |
|----|--------------|-----|
| 一。 | 火蓋さらる..... | 一〇三 |
| 二。 | 鹿ヶ谷物語..... | 一一一 |
| 三。 | あゝ吉水..... | 一二七 |
| 四。 | 小松谷の消息..... | 一二九 |
| 五。 | 配所に赴き給ふ..... | 一三三 |

第六章 東 北

目次.....

目次

- 一。愚 禿……………二七
- 二。佛天のお計ひ……………一九
- 三。石の枕……………一三三
- 四。内外多難……………一三七
- 五。六軸の寶典……………一四一

——本典の文、津梁の歌——

第七章 歸 洛

- 一。御裏方の得度……………一七九
- 二。稻田の門出……………一八一
- 三。神勅是れ炳焉……………一八七
- 四。口と筆……………一九三
- 五。化縁つさぬ(終り)……………一九七



聖 親 鸞

無物道人著

第一章 緒 論

のんかな。汽笛一聲、勇しく驛頭を發する汽車が、よく動きよく進み、よく動き得るのは、云ふまでもなく、堅い動かぬレールに據るからである。吾人が、一たび人生の旅に出で、よく動き、克くすすみ、よく動くことを好むならば、決して動かぬ、堅い金剛の眞心たる佛凡一體のレールに據るべきである。惟ふに、わが親鸞聖人は、麻の如く亂れた世に處して、能く動かれ、よく進まれて、精神生活の本義を實現され、また其上に、無實の罪をも甘んじ「是れ猶師教の恩致なり」と御感載あらせられて、世の多くの人を導き給はれた

〇のんかな……………

○のべんかな.....

ではないか。かの雪を褥や石を枕の艱難でさへ、一生之間能莊嚴と謝しつゝも、新しき眞生活を示されし如きは、要するに、確然不動の信念だ、即ち、如來より私共の内心に向つて開通せられてある、一實眞如の信心海によるの發展、之に外ならないことを知らしめ給ふと云ふ、思召しに歸して了んだ。どうかお互に、この誠ある、本願一實のレールによつて活動された、わが聖人の高蹟を尋ね、そして、其指導と奨励とを十分に會得し、飽く迄も、よく動き能く進んで、人生の目的を達するよう、克く働いて欲しい。夫に就ては、如何しても動靜已に非ずだ、で必ず、由ある信仰界の大偉人であらせられた、わが聖人のみ跡を辿つて、私共が處世上の羅針盤となし、もつて、彼岸に到る用意を整へねばならぬ。

抑々、わが聖人が御生涯に於ける御苦勞は、僅かな頁につくせぬ

ことは今更らだが、たゞ、其一端を述べやうとするのである。わが聖人は、如何に人生を觀じ、如何に大悲を味ひ、如何に私共を奨励し、かつ、御指導下されたか。それらを諸君と共に窺ひ、聖人のあ跡を慕ふてゆく我身の仕合せを喜び、光あり、力ある信仰の生活に親しみ、益々、一世の中安穩なれ佛法ひろまれかし。(聖人御消息集)

と、滿九十年の夕まで、御身を忘れて御苦勞遊ばされた、眞精神を服膺し、朝家の御ため國民のため、念佛を申しあはせたまひさふらは、めでたくさふらふべし。(同上)との金言を履行して、目的の彼岸に進んで行くやうに、努力しませう。お互に、聖人の精神を樹んで、向上の生活に身心を委ね、實際に於て、同朋の名に恥ぢぬ振舞を成し、佛の指示し給へる、「言行忠信、表裏相應、崇徳興仁、務修禮讓」の大無量壽經の掟を克く守りて、飽く迄、道に順ふ眞生活

○のべんかな.....

をやつて頂きたい。蓮如上人は「近來、佛法は人皆聽聞すといへども、一往の義をさきて、眞實に信心決定の人これなきあいだ、安心もうとくしきが故なり。」と、第四帖目六ヶ條の末文に、仰せられてあるではないか。されば私共は第一着に、眞實に安心立命して、廣く社會の上に、近く家庭のうへに、大悲の力を實現し、諸有の憂喜苦勞を報恩の資料と轉用し、目的と手段とを違えぬやうに、光明攝取の恩澤を感謝して、何時までも、住不退轉の仕合せを現實にし、たとひ、身は困苦に沈んでも心は安く、所謂、骨折ても苦のない生活にいそしむ、之が、信仰の産物である。聽聞不足は怪我のもと、よく聞き、よく信じ、よく働くのが聞信歸命の精神的生活であるから、よく氣をつけて世を誤らぬやう、法を誤らぬやう、聖人の流れくみの御門徒に不似合のなくせられたい。

二。かへりみん。

「往相還相の回向に、まうあはぬ身となりにせば、流轉輪廻もきはもなし、苦海の沈淪いかゞせん。(和讃) 私共は、み佛の救ひに依つて、二種の御回向に、まうあうことが出来なかつたら、今の苦海、この沈淪を如何して凌ぎ得やう。元來、私共は何處から來て、何時まで此土に存へるか。明日の我身には、如何なる運命が見舞ふて、次生は何處やら、前宿の場所も知らねば行先きのあてもつかぬ、冥より冥、苦より苦と、惑、業、苦の三道に往來して、而も、迷へることさへも分らぬ、あさましい状態に陥つて居る、實は我身知らずの徒ら者である。因縁あつて、生れ難い人界に生をうけながら、たゞ五尺の肉體に執着して、過去も未來も打ち忘れ、五欲の色に心を奪はれ、三毒の酒に酔ひ狂ひ、遂いには惡魔の奴隸とな

○大いんかん.....

○かへりみん……………

りはてい、又も悪趣に還るやうな、地獄魂を養ふて居るではないか。若し、如来二種のお恵みに預らなかつたら、泣き叫ぶとも仕方なく、飛んで火に入る夏の虫で、哀れな最後をとげねばならぬ。火を、恐いと知つて飛込む筈はないが、美しいとばかり見誤つた惑いから、命を捨つる、儂かない蝶の不便さは、そも何故であらう。あゝ、思へば無始己來の私共も、或は、彼等の仲間ではあるまいか。されど有難いことには、今日宿善開發して、爰に、聖人の御引導により、不斷煩惱得涅槃、此上なき大幸福を獲得する身と定められたからにや、世の風雨（煩惱）を苦にする時ではない、何んでも、我身にかゝはることは、勇み進んで果すと云ふ、一大決心を以て、報恩の生活に一身を捧ぐるが、お跡を慕ふ私共の光榮であつて、前途に充ちたる光に、心強さの、一層なるを感ずる。

三。 仰げば愈々高し。

わが聖人の御一生は、九十年の久しきに亘れど、正しく、本願一貫の大道に歸入し給ひたる、大安心の、中心點を提げて分類してみると、相對的求道生活と、精神的安心生活と、この二時代に窺い得ると思ふ。聖人が、吉水入室に至るまでの二十九年間、所謂、前半期の時代であつて、建仁元年三月十四日、吉水の禪房に入つて、而も、法然聖人の言下に、從來の暗雲忽ちに晴れわたり、たちどころに、他力攝取の旨を受得し給ひてより、御臨終の夕まで、佛天のお計に打任せられて、起居動靜、すべて道に順ふて大活動を遊ばされたは、即ち、後半期である。故に聖人自ら、自身の知識に訴へて、専ら、學門の光と修業の力とを以て、轉迷開悟しやうと、頻りに自力の奮闘を試みられた時は、即ち、前者に屬する

○仰げば愈々高し……………

○仰げば愈々高し………

から、罪惡の煩悶、生死の苦惱、さては有限不自由な肉體に對する、不安の念など、種々な心境を越え給ふた、形跡が見える。

如何なる賢人君子でも、相對的求道の生活に立つ間に、不安の念を脱することは、到底出來ないらしい。世には自己の要求のために、あるものに祈願して、心を安めようとする人がある。思ふに、その種の輩は、聖人の經驗し給ひし行專心雜の同族で、眞に自分は、佛より呼ばれて居る一子地の關係に、氣付かぬ者である。どうか互に、死すとも止まぬと云ふ大決心をもつて、必ず道に順ふて、み佛の御計ひに安んずる眞生活に入るやう、骨折つて貰ひたい。

もとより、本當の道に生るのが、人生本來の面目であるから、馬鹿に浮名幻利に氣をとられて、眞の大道に出頭せぬまゝに、一生を終るやうではならぬ。諸君よ、一番勇猛奮進せられたい。

四。淨土の妙境を縮寫して、現世の苦痛に克て。

古語に、鹿を追ふ者は山を見ずと。實にさうだ、彼等が峰谷を上下して、身を勞しながらも、行路の難義なのに不平の聲一つ放たない、と云ふ其精神は、全く、目的のために働くからだと思ふ。今も私共が一念の信仰によつて、如來常住の慈光に浴する者は、不朽の生命を頂いて、光明の法海に流入する即ち、勇猛精進の生活であるから、つねに、涅槃の妙趣を現象差別の波の上に味ふて、前途に輝く目的の面白さ、有難さ、嬉しさの餘りに、現在の苦勞を打忘れて、向上進歩の生活にいそしむ、是が所謂、最高の涅槃の徳と、低下の凡夫の罪とが、一の大願業力に結ばれて離れることは出來ない、佛凡一體の信仰生活と云ふのは、即ち、こゝを指すのである。固より、道に従ふ精神界には、

○淨土の妙境を縮寫して………

○淨土の妙境を縮寫して……

失意や得意、あるは順境逆境と、其變、境界のあるべきものではない。で、失意に泣く時、得意にほく笑む折、彼を苦にやみ此に溺るゝ、夫は共に、自力的生活の兆と知るがよい。若し、逆境に遇ふたならばみ佛の奨勵であると、さう思ふて、益々佛恩の深遠なることを喜ばして貰ひ、もし亦、順境に處するならばみ佛の指導であると、愈よ、佛恩の高大なることを謝して行くのが、眞の信仰生活である。わが聖人が、「われ又配所に越かずんば、何によつてか邊鄙の群類を化せん。是れなほ師教の恩致なり。」と仰せられて、一點の不平、一分の不満も洩しなく、配所に赴かれし如き、尙ほ、年々弘通の盛況につれて、より多く其化に預らうと、遠近より訪ひ來る男女に對しては、いと懇ろに、御同行御同朋よとかしづかれて、更に得意に誇られぬなど、何たる嚴かな尊い態度であらふ。

他力の信仰は平等である、一味である、即ち與へられたる如來回向の大信だから、私共の力味心や、計度心のあらふ筈がない、唯、み佛に任せするばかりだ。だからして、愚禿鈔の下には三違を明かされて、「一つには、佛の捨てしめ給ふ者を即ち捨つ。二つには、佛の行ぜしめ給ふ者を即ち行ず。三つには、佛の去らしめ給ふ處を即ち去る。」と示し下さつたではないか。互に、唯信佛語の生活に入らねばならない、而して、一度こゝまで進んでみると如何なる人も、無我の信念に促されるから、わが聖人と同一に、佛智不思議の加被力に安心して、心を弘誓の佛地に樹て、情を難思の法海に流すと云ふ、かの略典の情景を、容易く實驗し得るのだ。此處まで來なければ、競い起る煩惱の波が菩提の波と化し、従つて衆禍の風が清涼の風に變る状態を、感得することは難い。處が、此の情景を實

○淨土の妙境を縮寫して……

○淨土の妙境を縮寫して……………

感ずる時、始めて盡きぬ慰安と、甚大なる獎勵とに誘はれて、限り
ない快感に、自ら、我身の辛苦を忘れて了ふ、軀はやはり生死海に
沈みながら、心は浄土に遊んで、生死流轉の怖畏心は影を潜めて、
何時も大歡喜心に呼立てられて、差別の境界に立働さ、而も、平等
平和な新生活を遂行する光景に接するとは、何と云ふ幸福であらう、
思へば、感謝にたへぬ次第ではないか。たとい百萬の富を有つとも、
平和の光が輝いてゐなかつたら、如何して夫が、眞の幸福だと云は
れやう、決して云ひ得ない、然し、たゞ一片、眞實の平和が貰はれ
たならば、よしか、身は貧しき小屋住るであらうとも、その樂しさ
は、永遠不朽に榮ゆる基となる。だから眞の平和は、酒食や學問や
權利や職業の上ではなく、彼我の心に圓通する、絶對他力の信仰上
にこそ、歡味されるものである。

翻て世の中をみるに、ある一部の人は、外見の立派なのに眼を奪
はれて、悲しいことには心の底に、或る害虫の喰入つて居るのを知
らずに、頻りと平和を叫ぶ者がある。然し、そんな人の唱ふる平和
は、唯だ、姑息的手段の平和であつて、精神界永遠の平和ではない
のだ。歡喜と精進の香とが、永續せぬやうでは、本當の平和ではな
い。世間の多い人の中には、相互の平和を望んで、之が策をなすも
のがあるが、先決問題たる、自己が精神界の平和の期待にいつとひる
人の稀なのは、何故だらう。吾人は無論、國家、社會、家庭の平和
を望む者である。が、その先決として、自分の平和を期したい。す
ると、自己の平和を全ふする時、自ら、其徳は家庭に及び、延いて
は一村一郡に、果ては、國家社會の平和をきたすようになると思ふ
から。要する處は、平和の調子を自己の上求めて、而して、家庭

○淨土の妙境を縮寫して……………

○淨土の妙境を縮寫して……
社會、國家の平和を、促すやうにして貰ひたいものだ。處で、自己の平和とは何ぞや、と問ふならば云ふまでもなく、智情意の、調和發達をはかる事に歸する、換言すれば、宗教と教育とによつて發現したる自己にあらざれば、世を救ひ、人を救ふことは不可なりと、主張したい。元來、自分を救ふ力がなくて、如何して一家を治め得よう。一家の治者たる能はずして、一村の長たらんとし、一町一郡の制政すら難くして、一國の政權を握らんとするなどは、我慢なる利己主義の人であつて、其らの人が、世を濁す原因をなすのではあるまいか。見よ、彼等の治むる家庭や、社會の上には、始終不平の波が立ち、穩かならぬ風が吹く。つまり、毀譽褒貶に左右せられて、自分の本分も知らぬやうな人が、どんなに、世の爲めだ人のためだと、大聲したつて、どうして永遠に保たるべき、平和の光りがある

はれやう。で私共は、何よりも最初に自己の安心立命を、如來の三心(至心を至誠心と云ひ、信樂を深心と、欲生を回向發願心とも云ふ)に樹て、報恩謝徳の修養を積んで、眞の生活に入るものでないと、眞面目に、活動を遂行することは出来ぬ。

抑々、佛教の目的は何か、と云ふと勿論、涅槃の妙境である。涅槃とは、寂靜の意にて、大患長く滅して四流を超斷したる、即ち眞實平和の境を指すのだ。故に、獲信の行者よ、廣大なる涅槃の妙境に向つて進む他力信仰の諸君よ、永遠無窮の目的を有せざりし、無信仰の時代と、今日信心の上より生活する、感恩的精神生活を、比べ來らば、實に云ふべからざる思想の轉換を感じて、無限の快味

○淨土の妙境を縮寫して……

○淨土の妙境を縮寫して……………

を、新生活の上に認めずには居られまい。思ひ返へすに絶対他力の大道に踏込ひまでは、相對差別のうへに價値の相違を認めて、而も之に執着して居つた。それで、富める者は貧しき者より尊く、譽の低いものは、譽の高いものより賤しく思はれ、富者は貧者を賤しみ、貧者は富者を怨み、名有る人は名なき者を侮り、名譽少きは多きを妬むなど、いろんな心の境があつた。御覽なさい差別の上には、斯様な恨みや、嫉みや、あなどりやと種々な執着の火が、燃えてゐるでせう。然るに、一度絶対他力の大道に立つて見ると、此上なく、尊い佛心の光に照されるから、差別の間に起る色々な考へは、太陽の前の燈の如く、其の光を失ふてしまふ。で、相互に敬愛するやうになり、徹底したる平和な活路を行く様になる。此に始めて、今までの差別の感念より生じた、不平の波は一轉して、いまは、却つて

それらの差別があるために、社會が美しく装はれ、そゞろに柳櫻をこきませたる、春の如き風景を喜ぶに至る。看よ無信仰の家庭には、貪嗔の荒浪が狂ふて、相互に、打解けぬ心の上の暗があるが、信仰の生活には、至徳の風が和かに吹いて、歡喜の光に彩あざやかに、報恩の生活が營まれるではないか。佛教の佛教たる特色は、差別にあつて差別を超へ、相對にあつて絶対と共鳴する處にある。所謂、世間を出過して世間を見るのだ。であるからして、毀譽褒貶などには頓着せぬ、すなはち、自分が努むべきところを勤めはげんで、御冥見の裡に報恩の經營をなし、愈々勇猛精進に、極樂參りの仕事を

する。わが聖人が、御生涯上に實現なされた、他力信仰の大道には、傲慢無禮なる日野左衛門尉頼秋も、苦心満々たる修験者播磨公辨圓も、ともに、平等大悲の膝下に伏して、平和な生活に歸したてはな

○淨土の妙境を……………

○淨土の妙境を……
いか。眞に、これ信仰生活の標本であつて、また、わが聖人が、一味平等の信念を實現なされた、同朋的交の態度である。要するに、眞の大道は一味平等である、四河海に入つて、復本名なしと云ふ、唯、麗はしい同朋の感謝的生活があるばかりだ。「念佛の草庵は隘しといへども、恒沙の聖衆雲の如く集ひて、菴羅園の花座に同じく、三味の道場は狭しと雖も、無数の賢聖側塞して靈鷲山の菩提に等し十萬億刹宛も咫尺の如く、膝を容るゝの丈室、殆ど大虛の如し。」

(漢語灯録)

惟ふに人生の行路には、確かに、不満不足の苦痛は免れぬが、最後の目的、即ち到着地を認め得たる人は、如何して、行路の艱難辛苦に不平をこぼしてすまうか。人生を旅行に喩ふると、時には、

粗末な宿屋の待遇にも、辛抱せねばならぬ。増して、雨風強き夜半には、一層辛抱がし易い筈である。どんな折でも、宿賃は無論のこと、その上少しの茶代も置かぬと、出發にくい氣がする。抑々わが宗旨の信者は、往相回向の他力によつて、人生最後の到着地を認め得、其に向つて行く、人生五十年の旅行中には、修養(相續心)の宿と、勤勉(報恩行)の宿料とを忘れぬやう、其日々々々を氣嫌よく、社會の浪風とたゝかつて、念佛の光と力を輝かし、所謂大無量壽經の、「天下和順、日月清明、風雨以時、災勸不起、國豊民安。」の實をあげてゆくのだ。固より、宗教に依つて、最高の目的と決心とを得た人は、たとひ金はなくとも、位はなうても、また如何なる艱難に逢ふても、最後の大目的をして、目下の生活に意義あらしめ、正定不退の位地を以ては、現實の苦勞に堪へ忍

○淨土の妙境を……

○淨土の妙境を……
び、すべて、世をみ人を見るにも、佛をとほしてみることも、尤も肝要だと思ふ。全體、實を結ぶものには花がさく、得涅槃（未來にて成佛すること）の實果を結ぶ信仰の行者は、現在に於いて正定聚（他力の信心を得たる人は、再び、迷界にさまやう因が滅するから、不退の菩薩と同等の位地である、と云ふ意味の名だ）の花が咲く。

人生上に於ける正定聚（現生の利益）の花を捨て、未來の實ばかりが得られやうか、成佛（未來の上）の實のみを望んで、現世の花をみらぬ者は、生きて生き甲斐のない人だ。何と、心すべきではあるまいか。これより、わが聖人の御生涯に、その事實をたづねようと思ふ。

第一章 日野
一。都の花。

わが聖人の降誕は、今を去る七百五十餘年、人皇八十年代高倉天皇の承安三年の、四月朔日である。父君を日野有範と云ひ、母君を光吉姫と云ふ。當時、有範卿の館は山城國宇治の郡日野村で所領、二十萬石を以て世に知られ、方五六町の、いかめしき筋堀に圍れた邸宅であつた。霞かゝる彼方には、綺麗な宇治や桃山が望まれ、後には、美しい醍醐の峰が空に聳えて、眺めいと清き絶勝の地。廣き邸内には、あらゆる人工を加へたる木あり、竹あり、丘あり、水あり、花ありと云ふ有様にて、一たび池邊に立てば、恍惚として我れを忘れるやうで、歩を移つし巡れば、日も猶ほ足らずの思ひせられ、更らに、樓に上れば全景眼下に開けて、氣昇り心すみて、自

○都の花……

○響の響……………
ら、誰しも快哉を呼ばずにあられぬと云ふ、實に、浮世を外の淨境
であつた。有範卿は、大職冠藤原鎌足公の末流にして、名望と權威
と、ならび高ければ、世人よりの尊敬を一身に集めてゐた。而して、
其年未だ三十路に満たぬ間に、早くも位五位に上り、皇太后宮の大
進と云ふ高官であつた。わが聖人は、このうるはしき家庭のうちに、
呱呱の聲をあげ給ふたのである。

二〇 響の響

わが聖人の幼名を、松若君と呼んだ。何に不足なき家庭
に育ちし故か、あらぬか。其年の十一月頃には、已に、歩行も自由
に出来て、體の發育も驚くほど進んだが、未だ、半句の言葉もなし
給はぬ。思ふ事のなき家中にも、もの仰せなきこそ、たゞ其ばかり

が憂き種で、御兩親を初め、下に事ふる乳母や侍女まで、美しい若
君の笑顔を見るからに、切ない思ひに胸を痛めてゐた。何んでも啞
子ではあるまいかと、深き愁に鎖されつゝも、二歳の秋を迎へた八
月十五日、日野家にては、舊習によつて觀月の宴を催された。處が、
例によつて例の如く歌合せや、管絃の合奏、果ては廻る盃に夜の更
くるをも知らずにゐた。時に、有範卿の膝の上に在りし若君は、何
に感じたか、楓のやうな手を合はしたと思ふと、不思議にも、二聲
三聲高々と御念佛を申された。抱き給ひし父君傍への母君。その聲
さくなり、嬉し涙に咽ばれた。而して、やがて試みに、お月さまと
問ひ給へば、若君も亦、同じくお月さまと答へらるゝので、御兩親
は喜びのあまり、幾度となく、色々の言葉を問い試みられたが、や
はり、造作なく答へられるので、今は啞子を疑ふべくもなく、一座

○響の響……………

○聖の響……
の人々は歡呼の中に、復び、祝盃として秋の一夜を舞ひ明した。その昔、釋尊が御降誕あそばされて、始めて口を開かれたの御語が、天上天下唯我獨尊、と人のよく知る處であるが、今、わが聖人の初めて御發音が、又正しく天地に二つない、無上最尊の御念佛であつたとは、噫、何と云ふ尊い、而して有難いことであらう。奇なるかな妙なるかな。わが聖人が、その産聲を上げさせ給ふた承安四年こそは、從來、聖道諸宗の叢の中で、萬行隨一の取扱にあつてゐた淨土教の名花が、——後年、わが聖人の師たる人——而も、法然聖人（御年四十二）によつて、東山の吉水に、淨土宗と荅を破つて、一宗獨立の基を定められた年で、また、彼の九條關白兼實公が、法然聖人を招聘さして、念佛に心を傾け初めたと、同じ年であつたのだ。

三。花に風。

わが聖人が、如何ほど心配や苦勞を遊ばされたかを尋ねるには、是非共、當時の時代を知る必要がある、で暫らく、其世態に就て少しく語らうと思ふ。抑々、高倉天皇とは、人のよく知る彼の平清盛の妻時子の方の妹が、白河上皇の宮に上つて、生み奉つた第五の皇子憲仁親王その君である。夫から、松若丸君の得度なされた養和元年は、八十一代安徳帝即位の第一年である。清盛は、かゝる皇室との間柄故、早くも、新帝を立て參らせんものと、高倉天皇に迫つて、竟に、御年僅か三歳なる幼君を、み位にすゝめ奉つたのである。之によつても、清盛の振つた權勢が、如何に豪慢なりしかを知るであらう。況んや、彼が一族中には公卿十六人、殿上を許さるゝ者三十餘人の多きに及び、彼自身は、從一位太政大臣として、

○花に風……

○花に風……………

所領三十餘國、莊園また五百ヶ所を有し、平氏に非らざれば、人にあらずとまで謳はれたる、實に、平家の全盛期であつたのだ。此時にあたりて、源氏の一族中に危き一命を存へたのは、世に聞えある源三位頼政で、清盛の一統が權威に任かせて横暴を逞うし、勢に乗じて、彼等を恥かしむること屢々に及びては、流石に、頼政が堪忍袋も破れて、ついに反意を生ずるに至つた。古き言葉ではあるが、月に村雲花に嵐で、諸行無常の鐘の音は雲の上にも容赦なく、賤が家にも差別なく、盛者必衰、會者定離は等しき娑婆の習ひである。爰に、安元二年春の頃より、頼政と交り淺からぬ有範卿こそ、幸不幸は孰れか知らず、且らく諸君の默想に托する。

扱て、同年八月十五日日野有範卿は、卒然として他界の人となる。あ、昨日まで榮へに榮へし日野の館は、忽ち、暗雲の深く鎖す處と

なつて、卿逝去の報は、公然世に發表された。其の實、當時四才なる松若丸君は、兄範綱卿に托すべしと命じあきて、夜半人なきの時、私かに慣れし我が里を後にして、三室戸の奥に姿をかくし、彼頼政と氣脈を通じて、義兵を擧ぐることに努めてゐたと云ふが、果して真か。然し、幼なき松若丸君は、誰知ることなき此の出來事を、など知り給ふ筈もなく、唯々涙と共に喪に服した。亡き父君の遺命に依つて、從四位上若狭守藤原範綱卿の猶子として、何時しか五歳の春を迎へたので、能書の譽れ高き、從四位宗業卿について書道を學び、年を追ふて養父よりは、和歌を教はり、孝經や論語などの漢籍は、日野民部忠經より授かつた。範綱卿は勿論、師の民部すら舌を巻いて、若君の英才のだゞならぬを賞し、又この事を知る者、一人として多望を屬せぬものはなかつた程である。治承五年五月、三條

○花に風……………

○花に風……
高倉の宮以仁王を奉じて、頼政は愈々義兵を擧ぐべく、宮を、三井の園城寺に入御せしめ奉り、自ら其末山なる、宇治の明星山に居城して、平軍と對峙したが、時知らざるか、二十六日の戦ひに破れて、彼は扇か芝の露と消え、宮また不幸にも流矢の難に逢ひ給ひて、遂に薨ぜられた、翌二十七日には、清盛は破竹の勢にて、三室戸及び園城寺を焼いた。これより先、即ち五月二十一日、日野家には再び不幸の見舞ふところとなつて、吉光姫は、俄かにかくれ給ふた。噫、幼にして兩親に別れ給ひたる若君、わが聖人は如何に世を果敢なく感ぜられたであらう。内には愛別の悲哀、外には戦亂の變事あり、あゝ、眞に頼るべき唯一の力は何れにかあると、いたく無常を觀じ、深く人生の大問題に相遇して、爰に、抜くべからざる、求道の一大決心を起し給ふたのである。

第三章 求道

一。出家

養和元年三月十五日、貴族の家柄も、榮華の身柄も打捨て、眞實頼むべき親は何れぞ、長に、我が住むべき家は何處にかあるとの御心を以て入られたのが、栗田口の青蓮院である。養父の三位範綱卿は、松若丸の切なる希望に動かされて、止むなく參上致したる旨を述べ、何卒、御弟子に加へてお育て下されたしと、委細に物語て頼みした。慈鎮和尚は、逐一この話を聴取りあつて、大いに激賞せられ、特に破格の待遇を以て、得度御許のことがあつた。卿は、偏にその厚意を謝してゐる、和尚は靜かに、暮の迫りくる庭前をご覽なされつゝ、「時に、得度の式は明月擧げること致さう。」然らば何分ともよろしく。では明日……」と約し了へて退か

○出家……

んとするに、松若丸君、急に卿の袂を引いて、小聲して硯を求めたので、範綱卿も流石に退きかねて、侍僧に請ふて筆墨を借りうけた。かくて、若君は直に懐紙をとり出し、一首の和歌をさらりと認め、卿に渡された。

○田 家.....

明日ありと思ふ心のあだ櫻

夜は嵐の吹かぬものは。かう書いてあるのを、卿は讀終つて驚きのあまり、和尚の御前に示した。何事ならんと、訝りながら手にとられた和尚は、「あゝ私が悪るかつた、僅か九歳の今道心に教へられた」とはと事の意外なるに感激されて、夫より、直に得度の式にかゝるべく準備せられた。而して、全く式を了へたのは眞夜中であつた。時に、法名は釋の範宴とあつけ遊ばした。

二 山 狀

其後程なくして、わが聖人は比叡山の人となつた。平安城東に、巍然として雲間に聳ゆること、世に知られたる比叡の峰にて、かの傳教大師二十歳にして、末法の澆季、世態の無常を觀じ、竟に、天台宗を開いたのが此山である。大師は法相宗の出身で、初めは、奈良で學問修業に勤めてゐたが、市中では俗塵に染み易く、その上墮落に沈みやすきを歎き、憤然、起つて比叡に登り、女人結戒の制を設け、以て、天台の新教を説き、自ら、佛教の中心として時代の要求に應じ、數多世人の救済を負はせられた、高僧であつた。後、義真これを用けて圓仁に傳へた。圓仁とは慈覺大師のことで、此人の上足の弟子に安然大徳があり、かの無動寺は此人の創立にかゝる。わが聖人が、最初に入られた寺である。時は、安徳天皇壽永

○山 狀.....

親 聖

○山 状

の二年、聖人十一歳にして、世に聞え高き平家の都落ちと云ふ年であつた。同年七月十五日、三位中將平朝盛を始め、公卿も殿上人も連署の上、比叡の大衆に向つて、援助のことを申込んだ。然るに、此時をそくかの時早く、既に、源氏の味方にとられてから九日目であつた。當時、比叡を源氏の味方にせんと、大運動を試みたのは、彼の有名なる、木曾大夫坊覺明であつた。彼は元源家の士で、勸學院の文章博士、進士藏人通弘と呼んだが、源氏の衰亡に及んで感ずるところあり、突然、髪を興福寺に落して、入道信教と改めた。嘗て、以仁王への返牒に、清盛は武家の塵芥なり、と痛罵した爲めに、一方ならぬ清盛の恨みを買ひ、草を分けての搜索をなしたが、彼は運よく、其手のがれ辛うじて信濃に落ち、木曾義仲の參謀となり、平家追討の策を再び帷幕にめぐらした剛勇、覺明坊があつたから、

親 聖

終に、全山は源氏の味方となつたのだ。三千の山坊は、忽ち城と化して、數萬の大衆は源氏の兵卒と轉じた。かくて、間もなく義仲の大軍は叡山に乗込んで、三塔九院の僧徒は、圓顯に甲冑を被り、手に弓箭を持ち、各々、先を争ふて京都に亂入したので、法皇の潜幸平家の都落ち、上を下への大騒動と變つたのである。同年八月、義仲征夷大將軍となるや、直に亂を企て、後白川法皇を五條内宮に幽閉し奉るや、天台座主の明雲や、圓慶法親王、圓城寺の長史などまで、皆暴殺してしまつた。あゝ人生の轉變、無常の世態の頼みなきを感じずに居られやう。上皇は、其翌年（聖人十二歳）源頼朝に勅して、義仲を討たしめ給ふに、彼今や運つきて、粟津が原の露と消えた。時に一方にありては、範頼、義經は一の谷に平氏を破つた。壽永四年の春、義經は遂に平氏を屋島に破り、壇の浦にその一門

○山 状

親 聖

○山 狀……………

の二年、聖人十一歳にして、世に聞え高き平家の都落ちと云ふ年であつた。同年七月十五日、三位中將平朝盛を始め、公卿も殿上人も連署の上、比叡の大衆に向つて、援助のことを申込んだ。然るに、此時をそくかの時早く、既に、源氏の味方にとられてから九日目であつた。當時、比叡を源氏の味方にせんと、大運動を試みたのは、彼の有名なる、木曾大夫坊覺明であつた。彼は元源家の士で、勸學院の文章博士、進士藏人通弘と呼んだが、源氏の衰亡に及んで感ずるところあり、突然、髪を興福寺に落して、入道信教と改めた。嘗て、以仁王への返牒に、清盛は武家の塵芥なり、と痛罵した爲めに、一方ならぬ清盛の恨みを買ひ、草を分けての搜索をなしたが、彼は運よく、其手をのがれ辛うじて信濃に落ち、木曾義仲の參謀となり、平家追討の策を再び帷幕にめぐらした剛勇、覺明坊があつたから、

覺 親 聖

終に、全山は源氏の味方となつたのだ。三千の山坊は、忽ち城と化して、數萬の大衆は源氏の兵卒と轉じた。かくて、間もなく義仲の大軍は叡山に乗込んで、三塔九院の僧徒は、圓顛に甲冑を被り、手に弓箭を持ち、各々、先を争ふて京都に亂入したので、法皇の潜幸平家の都落ち、上を下への大騒動と變つたのである。同年八月、義仲征夷大將軍となるや、直に亂を企て、後白川法皇を五條内宮に幽閉し奉るや、天台座主の明雲や、圓慶法親王、圓城寺の長史などまで、皆暴殺してしまつた。あゝ人生の轉變、無常の世態の頼みなきを感ぜずに居られやう。上皇は、其翌年（聖人十二歳）源頼朝に勅して、義仲を討たしめ給ふに、彼今や運つきて、粟津が原の露と消えた。時に一方にありては、範頼、義經は一の谷に平氏を破つた。壽永四年の春、義經は遂に平氏を屋島に破り、壇の浦にその一門

○山 狀……………

○山 狀

を亡し、恐れ多くも安徳天皇は、海の底にも都を候と喜び給ひつゝ、海中に入らせ給ふた。思へば、袖も自ら濡るゝ次第である。聖人山に入て已來の五ヶ年間に於ける一山は兵營と變じ、大衆は僧兵と化したではないか。

あゝ、佛天の永遠に照したまふことなき、わが聖人ならば、何ぞ獨り、この亂世を脱し超然として、聖教に眼をさらすを得やう。聖人は世の狀態を觀る毎に、より以上に、自分の心の亂れを感じ給ふて世を救ひ人を救ふ前に、どうしても自身を救い得ねば、眞實な事業は決して出來ないと、さう云ふ決心の下に、道を求めらるゝの修業であらせられた。であるから、俗界の風潮に溺るゝ筈がない。想ふに時代の風潮は、わが聖人をして、益々、罪惡生死の問題に急がしめたのではあるまいか。聖人は、靜かにかの無動寺の大乗院に

○山 狀

在つて、當時天台、眞言、佛心の碩學たる權少僧都竹林坊靜嚴より、「天台四教義」の句讀を受けられた。これよりさき壽永二年に、小止觀及玄義、文句、止觀の三部をも残らず講習され、又、折々栗田に下りて、南家の儒者民部大輔を招きて、文詞を學び、白氏文集は殊に翫賞せられた、後、竹林坊靜嚴、毗沙門堂明禪及、南都の碩徳法隆寺の覺運僧都を、師として俱舍論、唯識論を教はつた。文治三年三月、慈圓慈鎮和尚より、毘廬舍那秘密灌頂を授けられた、時に御年已に十五歳、猶ほ、山内の英傑と呼ばれた明禪法印に隨つて、密學の修得に努められ、ついでその後には次の人より天台、法相、華嚴等の要旨を修め給ふた。林泉房大僧都智海、仁和寺の岡法橋、慶雅の弟子慶尊、南都の大僧都光俊、權律師空圓など。かやうにして、世のあらゆる學問に勉められたが、未だ、安心立命の道は得ら

れなかつた。智慧の力、修業の功、何れも結構ではあるが、以て、永世無窮の靈光に接するの明を見出すには難い。聖人はこゝに於いて、初めて、學問の力に訴へて、生死問題の解決をなさうとするは、全く、不可能なることを悟り、尙更ら修行の功によつて、罪惡煩惱の斷滅を計らうとするとは、到底その實行の容易くないのを痛切に感得せられて、一大奮發の意を決し給ふた。

三。參籠。

わが聖人は十年一日の如く、勉學と修業とに、心膽を碎き給ひしが、然も、自己を救ふてふ問題の解決は得られぬうち、端なくして、太子の靈廟へ參籠を思立せられ、河内國石川郡磯長の里なる、聖德太子埋骨の地に到着せられたのは、建久二年九月十二日

○參

籠……………

であつた。かくて翌十三日より十五日まで、三日三夜廟前に參籠して、一心こめて祈念せられた。處が、不思議なるかな第二夜の三更何人の聲か、何處ともなく呼ぶやうである。あゝこれ氣の迷か、さても怪しと訝りながら聲する方を眺めやれば、こはそも如何にぞや、光明赫々として窟の内外を照し、儼然と空中に立たせ給ふ、太子のみ相を拜んだのである。此時、太子は告命して曰く、

我三尊化三塵沙界、日域大乘相應地、諦聽々々我教命、

汝命根應二十餘歲、命終速入三清淨土、善信々々眞菩薩。

と、聖人、此告命を聞き玉ひては、如何して戰慄せずに居られやう。

あゝ、こは夢か幻か、否な夢でもなく幻でもない、光明は幻の如く消え、み相は夢の如く失せたが、告命は確かに耳底に残つて、轉た靈感にうたれ給ふた、汝命根應に十餘歳てふ死の宣告を蒙つた聖人

○參

籠……………

○神龍.....
(十九)は、層一層、求道に心せかざるを得なかつた。噫、此一事を以てしても、わが聖人が、如何に罪惡生死の問題に心を注ぎ給ひしかじ、窺はれるではないか。お互に流れを汲む者は、一入に、かくまで迷悟昇沈の心境を急がせ給ふた、思召しの程を、折角樹みとつて貰ひたい。

四。神龍

建久八年二月(聖人二十五)。慈鎮和尚は、聖人を招かせられて、小止觀及往生要集の講義を命じ、或は難問を提出して、學力を試みられた。こゝぞ吾が技量をあらはす時なりと、師の仰せとはるゝ質問を、明確にお答へされる。和尚は大いに喜び給ひて、此旨を奏問なされたので、聖人は六月二日、少僧都に任せられ、聖光

院の門跡にあげられた。なほ和尚は二度までも聖人を招き給ひて、三大部會得の旨を述べしめ、併せて、止觀の奥義を重々御問答遊ばされた末、師の僧正は、真にこれ北嶺の神龍なりと、御感賞を下し給ふたと云ふは、正治二年正月の事である。然るに其夏、又もや師の仰せによつて、華嚴の奥義を講ぜられた。かく和尚の命によりて講苑に上ること、茲に三たび、懸河の辯、無碍の詞、滔々としてつくることなき説明は、竟に、三千の大衆をして、今後比叡山の座主となつて、宗教の大權を握る者は、唯、範宴僧都より外にあるまいとまで、激賞するゝに至つた。この時にあたりて、かゝる大榮譽を負ひ給へる、わが聖人の得意の程はどうあつたらう。二十五の春を迎へた二月には、思ひもよらぬ少僧都、門跡の光榮に接し、いま又満山の聲望、我をして、本朝第一の良辨なりと、令名さるゝを耳に

○神

龍.....

○恩賜……………
しては、如何して喜悅に咽はずに居られやうか、咽ばずには居られぬ。

五。恩賜。

土御門天皇正治二年、禁中より「戀歌」の勅題が下つた。上皇御歌所を設け給ひ、新古今集の勅選のあつた前年で、當時は和歌の盛なる時として、内裏へ奉つた歌の數は、實に數へ切れぬ程であつたが、その中で秀れたのは、

我か戀は松を時雨の染かねて

真葛が原に風さはぐなり

と云ふので、即ち、大僧正慈圓慈鎮和尚の詠進であつた。これがいたく上皇の歡感に入り奉り、慈圓が歌にすぐれるものはなし、との

御説であつた。處が、一つの問題が生じた。それは、歌そのものよりも、僧正が身の上の檢議であると云ふのが、一生不犯の彼として、かくも穿ち得た戀の眞味が、歌へやう筈がない。全く、戀に覺えあるに違いないと云ふので、果ては、僧正の戒行を疑ふあまり、流罪の沙汰にも及んだが、或人の、今一度僧正に覺えあるまじき題を試みて、然る後に於て、事を決するもをそからじと云ふ説によつて、再び「鷹の羽の雪」と、こんな勅題が下つた。歌聖の聞え高き僧正は、何の苦もあらばこそ

雪降れば身にひきそふるはしたかの

たいさきの羽や白ふなるらん

と詠んだ。之を上るべく使者の命を蒙つたわが聖人は、一には師の冤罪を雪がんと禁裡に參り、傳奏を経て、主上に奉つた。御上

○恩賜……………

○題
を初め臣下の面々、拍手して、實に明才の知らざることなし、と口をきはめて、褒めたへぬ者はなかつた。使者は誰ぞ。との勅問があつたのに、公卿の一人が、故皇太后宮大進有範の長子にて、今は聖光院門跡少僧都範宴なる由を、奏答せるに、「では父は玉葉集の撰者、養父も歌人であり、殊に師匠は斯道の達人故、定めし範宴も深い心得あらん、みよりの羽、を詠むべし。」との御勅詔が下つた、聖人は直ちに、次の如く詠進し奉る。

はしたかのみよりの羽風ふきたて、

をのづと拂ふ袖の白雪

これを御覽ありたる、上御一人より、堂上の公卿に至るまで、流石は、三位の猶子慈圓の弟子かなと、何れも賞讃せられた。其の時、主上にあらせられては敬感のあまり、檜皮色の御衣を、當座の御褒

美として授け給ふ。聖人は、大事な師の恩命を果したばかりでなく、かゝる恩賜の光榮にあづかつて、恙なく、喜々として歸山せられた。

六。煩悶

わが聖人は、殿上の榮華を九歳の春に打捨て、父母の菩提、我身の出離、人生問題の解決を獲收せんと、今日まで辿り來ながらも、復び、雲上の譽れに心奪はれ、假名の修學にとらはれたる事を追想しては、思はず身を震はして、嘆聲を發せざるを得なかつた。思へば、我身ながらも迷ふたり、何時か浮世の波にひかされて、當初の心を失ひしは残念である。門跡何ぞ。僧都何ぞ。紫の衣、金欄の袈裟、生死出離のためには、何程の料にかなる。十有九年の學問と修業と、果して、前途永遠の光明を認むるの力を、有するか否

か。あゝ、自分は二十八歳の今日まで、尙も迷い來りし、我身の罪業を如何せん、わが生死の解決は如何にすべきと、茲に斷然、權勢名利の念を斷ち、修學修行をうち捨て、専ら、出離解決の要路を求め、心月を觀ずと云へども、妄雲なほ覆ふの煩悶は、夜となく晝となく、募り來るを覺えては、流石の聖人も、男泣きに泣き、そして、到底人力の施しがたきを認めたので、同年の十一月にいたりて、三七日の間、根本中堂の藥師如來に祈願をかけて、加被力を仰いだ。然し何の所詮もなく、苦悶は増々はげしくなるので、遂に、無動寺の大乗院に籠り、如意輪觀音に向つて、ひたすら末世相應の妙法、凡夫往生の大導師たる人を告げ給へと、寢食を忘れ給ふた。此の間三七日の丹誠であつた。往年、磯長の靈廟に於て、死の宣告をうけ

給ひてより、已に十年、光陰は矢よりも疾く、こゝに二十九歳を迎へられた聖人は、眼前に迫る死の問題を、如何に解決すべきかと、涙と共に、六角堂へ百夜の祈願をつゞけ給ふた。あゝ、思へばわが聖人は、嚴冬酷冬の候にもかゝはらず、比叡の雪は腰を埋め、加茂の川風は骨をささび折柄、宵に出で、曉に歸る、往返七里と云ふ難路は、實に命がけの仕事である。此一舉は誠に、わが聖人が死活を定むる、最後の求道であつたのだ。果せる哉。かくて九十九日目の曉天、鴨川の橋畔で、安居院の法師聖覺大和尚に、聲をかけられたのが宿善到來、初めて、如意輪觀世音の暗示に想到して、心俄かに時めいた。

……著者の寺の歴史……

往昔、禪家の大徳圓藏和尚が座禪の古蹟として、當時、龍泉庵と稱せしも、領主瀑布御巡見の砌り、臥雲山龍泉寺と號すべしとの御沙汰ありてより、初めて寺基が開かれたのだと云ふ。彼圓藏が永正十八年三月二十四日、七十歳にして入寂するや、教智二代を續く。此時に至り、眞宗本願寺の末寺に改宗し、其後宗智、圓智、正因、教輪、智嶺、誦嶺、惠吟を経て、第十世無染に及ぶ。就中無染は道心堅固にして、八十三年一日の如く爲國爲法に身を忘れつゝ、明治十三年三月六日、念佛の息は絶へて久しき眠りに就かれた。父津梁は其のあとをうけて現存だ。

一。綽空生る。第四章 吉水

生死出離の苦悶に泣明かし給ふた、わが聖人は到底自が造作の頼むに足らぬに氣付かれて、廓然として、吉水の禪房に入り、法然聖人の袂にすがつた。是れ實に、建仁元年三月十五日である。「慈圓僧正の弟子に範宴少納言とて、さる人ありとは、我も聞きわたるが、よくこそ尋ねて呉れた。」とは法然聖人が、わが聖人と初對面の御挨拶である。親にはぐれた子が、初めて、眞のわが親に遇ふた心地で、日頃の煩悶は不思議にも、已に、その半ばは解けたやうで、悦びの情は潮の如く、わが聖人の胸に湧いたに違いない。「私は仰せの通り僧正の弟子、範宴であります。今日は餘の義ではありませぬ、偏に、生死流轉の迷界を出離する道を、御尋ねした

○綽空生る……

○神空生る……

いばかりに参りました。いと泣き／＼に遁世の次第を、打明けて語られた。法然聖人は、「あゝよくも来り給ふかな、實に有難い、宿縁の源厚も思ひやられて嬉しい。では先づ、御身の心底を隠さず述べたまへ。」と。わが聖人は、他郷に在つて辛苦艱難をなめつくした兒が、久し振りに故郷に歸り、今迄の苦勞を、両親の膝下に語るやうに、父母に死別した逆縁や、菩提のための出家、學問や修業の經歷、出離生死の苦悶を一々物語られた。逐一御聞取りあつた法然聖人は、直に彌陀の本願を説いて、出離生死の苦海に悶々煩ふ私のために、大悲の如來は、かゝる私共を救はんために、本願を立てさせられた旨を説き示めされた。實を云へば、私自分から願を起し行をはげみて、お救ひを求めねばならぬのに、今はさうではなくて、私は全く、如來の方よりお求めに預つて居るのである。私共は罪に溺れて

覺 親 聖

○神空生る……

ゐて、心の弱い始末にをへぬ根生である事を見貫かれて、私共になりかはつて、如來は、私共が起さねばならぬ願と、私共がつとめねばならぬ行とを、御身に修め給ひて、私共をこのまゝに助けんと呼かけ給ふ、御慈悲のかたまりが、第十八の御本願である。即ち、み親の聲が南无阿彌陀佛である。で私共は、我身の善惡を打すて、念佛の力によれば、屹度往生するに違いないと思ふて、稱名するより外に、何の仔細もさらに無い故、たとい千佛世に出で、念佛は往生の行ではないと、教ふるとも、夢々それを信じ給ふなよ。念佛によつて、罪障の凡夫が、淨土に往生すると云ふことは、これ全く、釋尊の御誠言であつて、決して、凡夫の妄執ではない。若し、誤つて往生が出来ぬと思ふならば、必ずこの源空がゆく所へ共に行くと思ひ給へと、宗の淵源をつくし、教の理致をきはめて、懇切に説き

○縛空生る.....

いばかりに参りました。と泣き／＼に遁世の次第を、打明けて語られた。法然聖人は、「あゝよくも来り給ふかな、實に有難い、宿縁の源厚も思ひやられて嬉しい。では先づ、御身の心底を隠さず述べたまへ。」と。わが聖人は、他郷に在つて辛苦艱難をなめつくした兒が、久し振りに故郷に歸り、今迄の苦勞を、両親の膝下に語るやうに、父母に死別した逆縁や、菩提のための出家、學問や修業の經歷、出離生死の苦悶を一々物語られた。逐一御問取りあつた法然聖人は、直に彌陀の本願を説いて、出離生死の苦海に悶之煩ふ私のために、大悲の如來は、かゝる私共を救はんために、本願を立てさせられたお旨を説き示めされた。實を云へば、私自分から願を起し行をはげみて、お救ひを求めねばならぬのに、今はさうではなくて、私は全く、如來の方よりお求めに預つて居るのである。私共は罪に溺れて

覺 親 聖

ゐて、心の弱い始末にをへぬ根生である事を見貫かれて、私共になりかはつて、如來は、私共が起さねばならぬ願と、私共がつとめねばならぬ行とを、御身に修め給ひて、私共をこのまゝに助けんと呼かけ給ふ、御慈悲のかたまりが、第十八の御本願である。即ち、み親の聲が南无阿彌陀佛である。で私共は、我身の善惡を打すて、念佛の力によれば、屹度往生するに違いないと思ふて、稱名するよも外に、何の仔細もさらに無い故、たとい千佛世に出で、念佛は往生の行ではないと、教ふるとも、夢々それを信じ給ふなよ。念佛によつて、罪障の凡夫が、淨土に往生すると云ふことは、これ全く、釋尊の御誠言であつて、決して、凡夫の妄執ではない。若し、誤つて往生が出来ぬと思ふならば、必ずこの源空がゆく所へ共に行くと思ひ給へと、宗の淵源をつくし、教の理致をきはめて、懇切に説き

○縛空生る.....

○禪空生る.....
さとし給ふた。わが聖人は、かく御懇なる法然上人の教へを聞いた一念に、從來の暗雲は忽ち晴れて、立所に、他力攝取の旨を受得し給ふて、飽くまで、凡夫直入の真心を決定された。茲に於てか、わが聖人は、世を遁るものは名をのがるとか、願はくば、今日より弟子の數に入れ給へと、直に、師弟の契を結ばれたのである。時に、何なりとも我名を下し給へと願ひしに、大師上人は、自分が門人も多いけれど、かく速かに、かつ、さやかに聖道自力をすて、淨土他力の門に入る者は類い稀で、恰も、西河禪師の餘風があるからとて、禪空と命じ給ふた。即ち、空の一字は師のお名を分ちて、附し給ふたのである。わが聖人は其場に於て、隨行したる供奉の人々に、それく御暇をつかはしになつたので、彼等は、力なく空車を曳いて聖光院へ歸つた。

二。 隱遁の志

「隱遁の志にひかれて、源空上人の吉水の禪房にたづねまいり給いき。」と御傳抄に仰せられてある。隱遁とは、如何なる意味の文字であるかを、今次に語らう。さて、隱はカクレ遁はノガルと讀む字で、つまり、かくれのがれて、吉水に入らせ給ふた意だ。夫ではわが聖人は、唯比叡の山奥から都の吉水に入られたばかりでは隱遁とは云い難いではないか、と云ふに、こゝが實に有難い處である。古句に

蚊帳あげて未だ一重あり夏の月。

と云ふのがあるが、丁度、此れと同じ感じがするではないか。定散諸行の蚊帳の中では、真如の月は見がたいと、蚊帳を開けて飛び出たが、未だ定散心の障子一重があつて、本願の月が眺められぬ。そ

○隱遁の志.....

○廢立の實をあげよ……………
こで、障子一重の定散心を開けたいと、叡山を飛び出して、吉水に入らせられた。で隠遁の志にひかされてと、仰せられたのだ。他の言葉も以て云ふと、學問や權利の花々しき形の上をぬけ出で、安心立命の、心の上の都に身をかくして、永劫の凌ぎをしたいもの、思召だともうけらるゝ。

三。廢立の實を擧げよ。

わが聖人は、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に、別の仔細はなかつたと、速かに、他力の信仰にもとづかれたのは、その數も多き門弟中に、たゞ聖人一人であつたのは、そも何故であらうか。云ふまでもなく、心の居場が違ふからである。他の多くの御弟子は、定散心の座（心底）にすはつたまゝで、み教へを受け

られたが、わが聖人は、定散の自心に泣き倒れ、苦悶の結局、法文の沙汰も名利の是非も打捨て、唯偏に、今日の我が出離を解決したい熱望より、自分の心の世話をなげうつて、み教に預つたから、かくも速かに御了解が出来たのである。實に、これは生きた御手本で、私共は、深く留意を此處に要する。試みに一例をあげると、わが聖人の御引導で、やはり法然上人の御弟子に加はつた、彼の聖光房をごらん。彼は、初め求法のために京に上る足の踏出しからして、わが聖人とは、大變に違つて居た。或日聖光房思ふやう。京には、智慧第一と稱する聖人が在すと云ふけれど、評判ほどはあるまいから、自分が一つ上洛して其力を試み、若し我れより智慧がすぐれて居るなら、彼が弟子とならう、もし又我れ問答に勝たば、彼を我が弟子としやうと。こんな心で吉水に入つたのである。で如何して、

○廢立の實をあげよ……………

○廢立の實をあげよ……………
絶對他力の安心になりきることが出来やう。最初彼が禪房に來りし時、我が聖人の取次で、空上人と初對面なされた折、師の聖人は、ハタと修業者（聖光房）をねめ給ふに、彼も亦同じくにらみ返して、やゝ久しく互に言教なかりしが、法然上人の仰せに、「御房は何處の人にて、何用ありて來り給ふぞ。」と先づ口を開き給ふに「我れは鎮西の者にて、求法のために上洛いたし、推參仕つてござる。」然らば求法とは何れの法なるやと問ふに、念佛の法なり、と答ふや、すかさず、では唐土の念佛なりや、又日本の念佛なりやと重ねて問ひ給ふに、彼は暫らく考へた。そして、唐土の念佛を求むる者であると空上人はすかさず、其では、善導和尚の御弟子にこそあるなれと仰せられた。やがて修業者は、懷中よりツマ硯を取り出して、二字を認め捧げて、師弟の約を結ばれた。（已上は口傳抄の取意）かくの如

くにして、法を求めたのであるから、何んで、第十八願の純他力に安住することを得やう。聖光房が國へ戻る時、三の誓（勝他、利養名聞）を切らで行くとはと、歎かせられた師聖人の金言は、獨り、彼ばかりが頂く御意見ではない。今日の私共も、姿形が眞宗の門徒同行の仲間であつても、第十八願の、他力回向の信心になり得ぬ人は氣の毒ながら、我が眞宗の御門徒ではなく、聖光上人の御門徒と云はねばならぬ。

四。自力の根底を抜け。

平安朝四百年の末、保元、平治、源平の亂とちつゝいて、遂に、鎌倉の時代となつた。叡山に在つては、南都北嶺の葛藤、山門寺門の紛擾、殊に源氏方に一味した叡山は、名利や

○自力の根底を抜け……………

○自力の根底を拔げ……
 權勢と浮かれ廻つてゐる中に、宗教の中心は、何時か吉水に移つてしまつた。蛙ヶ島に流されてゐた頼朝が、一度起つて以來、政治の中心は鎌倉に期し、佛教の精神は叡山を去つて、念佛の功德を説く、法然上人の膝下に集まるので、諸寺諸山の心ある僧徒は、大いに驚いて、戒律復古の旗をあげるやら、念佛攻撃の叫びを放つなど、追々と騒ぎはじめた。嘗て、奈良朝に開かれた佛教は、僧俗の接近が餘りに甚だしかつたためか、思はぬ弊を招いたから其れに鑑がみ、女人結界の制を設けて、平安佛教の中心を築いた、かの傳教、弘法の精神は、何時しか、世人の記憶より遠ざかつて、平安朝末に至つては、その形骸さへも早や崩れ初めた。一方からは梅尾の明恵上人他方からは笠置の解脱上人、其外、東山には泉涌寺の正法國師俊仍、深草に陳をかまへた道元禪師、先づ此等の人々が相互に、戒律復古

に力をつくして、宗教革新の機運が動くと言ふ有様になつた。此時に當りて、わが聖人は、更らに戒律などは口にせぬ、それは云ふべくして行ふことの難きを看破せられて、層一層、時機相應の法門を讃仰し給ひ、以て、聖道權化の方便に長くとゞまつて、徒らに、諸有に流轉の身となるを歎き、どうしても他力の悲願によらねば、出離は到底覺束かないと、専ら、絶對他力に安住すべきを勧められた。蛇蝎姦詐のこゝろにて、自力修善はかなふまじ、如來の廻向をたのみずば、無慙無愧にてはてぞせん。(和讃)の御信念であつたのである。あゝ思へば、有難いお心ではありませんか。わが聖人は、二十年間の學問や修業の實驗上で、如何なる學問の力でも魂の行先きは分らぬ、所謂、心靈の安立は出來ぬ。如何程の修業でも、意のままに煩惱を斷つことは難いと、斷然自力を捨て、他力に歸し給ふて、

○自力の根底を拔げ……

○自力の根底を拔げ……
 「難行の小路迷い易きによつて、易行の大道にももひかんとなり。の福音を、自ら、吐露せられたのである。已に、聖人は實驗中に於て、第十九の願、第二十の願、第十八願とこの三願轉入の深意を會得なされて、別途不共の他力を、強く味は入れたが、今日の同行は膝の上から、第十八願の生育てに預りながら、他力の信心が喜ばれぬと云ふは、何故だらう、持つて生れた自力根性を捨てずに、他力を喜ばうとするから、眞の安心が得られぬのだ。それ汽車が出る、早く切符を買はねばと、両手に持つてゐた荷物は置いたが、切符を買ふ時だけで、捨てたのではないから又持つて行くと同様で、他力攝取の汽車に乗るにも、信心の切符が要るからと、その買ふ時ばかり、右手に提げた三福の行李も、左に持つた定散二善の手荷物も、地上に置いてたが、もとより捨てたのではないから、聽聞する時だけ

○自力の根底を拔げ……
 の他力信心であつて、渡世家業の汽車の中では、やはり、三福の荷物を扱ふたり、自心の行李に氣をとられる。置いたのと捨てたのは大變な相違だ。こゝを取り誤らぬやうに注意を十分にして欲しい。たとへ一度捨てしも、亦拾ひ上げて使用ふやうでは、西山の開會と同様で、實際に捨てたとは云はれぬ、要するに、或る時は他力の信と喜びもするが、又、たまには此ではあれではと、世話心の起ると云ふのは、半自力半他力の信心である。眞實徹底したる報佛の功德に満されぬ一隅があると、其處から、定散心の世話心が生ずる、所謂、佛智の満入せぬ部分が、やがて半自力の住家で、得手勝手の新し地盤である。諸君よ、證大涅槃の目的の下に、向上發展の、新生活が出来ますか。何人と雖も、此の目的に向つて新生活に入らんとする者は、よろしく、定散心の根底からスツカリ打捨て、仕舞は

○自力の根底を拔げ……

ねと、たとひ、雜行雜修の行體や修相は、無くなつたやうでも、純然たる眞實の、他力の信念に住むことは難い。多くの人の中には、知らずく、自分の力で、他力を認めやうとする念ひがすたり難いやうに見受くるが、それでは、眞の味をあぢはふことは出来ぬ。多少苦しみ悶ゆる位は骨折らぬと、眞に、信仰の堂奥には座はられぬ。固より、自分の力の益にたゝぬことに、心の底から合點がゆかぬと、自力の細工はやまぬ。

勢つきて引きあげられし蛙かな。(古句)

狭い井の中で逃げまわつた蛙が、自分の力のつきた時、廣い天地に引上げられるのと同様に、間に合はさうと根限り骨折つた、自分の勢力のつきたその一念の時、初めて、無限の力に救ひあげられて、大なる他力を得るのである。小さい自分の力を、大きくしやうとす

る自力根性のつきた處に、天地にあまる無倫の力を得て、心弘く體ゆたかな、眞の生活が生じて来る。つまり、安心が出来ぬと云ふのは、自分の力を添へて居るからだ。自分の力には限りがある。此の限りのある力が手傳ひをしてゐるうちは、眞の安心はできぬ。愈々安心はならぬと、自分の力のつきた時に、始めて、純然たる他力に生きて大安心の力が、發現されて来るのである。

五。家族的宗教起る。

建仁三年四月、六角夢想も何時しかすぎで、はや比叡の峯には雪を頂き、鴨の川風に身の寒さをかこつ折柄、吹く風に雪を添へて、禪室の扉を打つ今日しも己を忘れて、法然聖人の御前に、お話を聴聞してゐるのは、前の關白太政大臣藤原兼實公であ

○家族的宗教起る……

○家族的宗教起る………
 る。聖人の三百に餘る御弟子は、何れも皆、淨行智徳の人ばかりであるが、私は朝夕妻子にひかされ、酒を飲み肉を食ひ、五欲の在家に寝起きしてゐるから、一生不犯の出家方の申す念佛と、私のやうな不淨の身で稱ふのと比べたら、定めて劣つてゐるでせう、此の義は如何でしうか、兼ねての不審であると公はお尋ねした。時に法然聖人は、淨土門に於ては機の善悪も云はず、僧俗の身分をも問はず、同一念佛、無別道故である。本願の念佛には、ひとりだちをさせて、すけをさゝぬなり。すけとは智慧や、持戒や、道心や、慈悲をもすけにするなり。善人は善人、悪人は悪人なりに念佛をする、即ち唯生れつきのまゝに念佛する人を、念佛にすけさゝぬと云ふのである。と懇ろにお諭しなされた。公は大いに喜び、實に有難い御化導かな、此兼實が在家止住のまゝで申す念佛が、智行兼備の御出

家方の稱ふる念佛と、露聊かも、勝劣がないと聞かして貰ては、實に嬉しい次第である。處で、もう一つお尋ねしたい、外でもないが、私は近頃生活のために彼是氣をとられて、どうも御念佛を忘れがちでならぬが、此義は如何して可いでせうと問ふたら聖人は直に、此の世の暮し方は、念佛の申さるゝ方の側に從つて過すが好い、念佛のさはりになるやうな方面は、さけて捨てねばならぬとて、猶ほ次の六個條を述べられて、諭し給はれた。「一所にて申されずば、他所に住して申すべし。ひじりにて申されずば、在家になりて申すべし。在家にて申されずば、遁世して申すべし。獨りこもりて申されずば、同行と共に申すべし。衣食協はずして申されずば、他力に扶けられて申すべし。他人に扶けられて申されずば、自力にて申すべし。」と。要するに、念佛を申さんためには、妻子も從類も持つがよい、念佛

○家族的宗教起る………

○家族的宗教起る……………
の障りになるならば、持つてはならぬ。學問や財産が、念佛を稱ふる助縁となるならば、大切だが、若し、其等があつて念佛が申されぬならば、皆捨てねばならぬ。つまり、念佛往生が目的であるからは、その目的に達する道行きに於て、碍りになるものは排斥し、助けになるものはとつて行かねばならぬとの、御教化であつたのだ。靜かに頭を垂れてゐた兼實公は、やゝあつて、言葉を改めて云うやう、「時に、念佛を申さるゝやうに日を暮らせとの、今日の御教化。私には一人の娘があつて、子の行末を思ふのは親の煩惱である、處で、老後の思出でに養子をとつて然るのち、心安く念佛を申したい。殊に在家出家の申す念佛に變りないとの事なら、御弟子の一人を、私の養子に下さつたならば、論より證據で、念佛を申す助縁には、此上なき仕合せと存じますが、御開入れは出来ませうまいか。」大

師上人は、公の言葉の終るをまつて、それは何の仔細はないとて、早速、わが聖人を御呼寄せになつて、今日より公の願ひに従ふべしと仰せられた。かくてわが聖人は、其後程なくして藤原兼實公の女玉日の方と、御結婚を遊ばされた。時に、聖人は御年三十一にして、女は十八歳であつた。茲に始めて、肉食妻帯、在家往生の活教本の實現を見るに至つた。わが聖人は、妻子を相手に、世間に奔走するまゝで、往生の業事の成辨する、家庭的精進（信心爲本）生活のお手本を示し給ふたのである。私共は、倫理を超越したる絶対他力の信仰によつて、眞に、人生の意義を解し得る、倫理的宗教であると云ふことを、信ぜずには居られぬ。翻つて觀るに、當時の高僧傳中に、わが聖人の御名を載するは、佛教の恥なりと思ひまきはれて、除かれたことを思へば、わが聖人は、如何に攻撃非難の的とならせ

○家族的宗教起る……………

○選擇集の付屬………

給ふたかゞ分らう。どんなにか、墮落僧の御名を被らしめられ給ひしかを、思へば想ふほど、勿體ない次第であるが、これとても、私を思ふて下さる御慈悲からと知らば、實に、あなたの御恩は、身に及ぶ限り報ぜねばならぬ。あゝ、偉大なる聖人の人格は進みゆく世と共に、その感化は、全世界に輝やくやうになつて來た。この有難い流れを汲み私共は、一同に心を合はせて、報恩の志を増進せざに居られやうか。

六。選擇集の付屬。

元久二年三月十一日の早朝、禪房に參つたわが聖人を、法然上人は、他に未だ人なきを幸ひに、膝近く召させられて仰せあるに、貴坊は、他力往生の法門に於て、世に並びなき名僧

の見込みがある。自分は先き頃、上下二巻の秘書を製作したが、此には、源空が心のありだけを書いたので、他力往生の法門は、之より外にはない。處で、今これを貴坊に授くるから、速く寫しとつて貰いたい。尤も、他力往生の底を叩いて書き顯はしてある。で聖道自力の人が見ると、誹謗のもととなる。そしらるゝ此身は少しも構はぬが、誹る本人が、墮獄の罪となるのが可哀相だ、他人に見することは堅く禁じてとくと、秘かにわが聖人に御授けになつた。之を世にその名高き、選擇本願念佛集の御聖教である。わが聖人はあゝ勿體ない、忝けないと押し頂いて御禮を申し上げた。嗚呼彼尊の門下に入つて以來、僅かに五ヶ年、多年常隨の上足の弟子も居らるゝ中に、不肖なる私に對して、かやうに大切なる御秘藏の聖教を授け給ふこと、眞に、わが身にあまる仕合せなりと、厚く、その御

○選擇集の付屬………

深切のほどを謝して、岡崎の庵室に歸られた。御授與の御聖教を机上にのせ、香華をそなへ、手に念珠をかけられ、そして命の如く、最初の二行をかゝずに三行目から、恭しく御寫しになつた。かくて日ならず寫し終るや、早速、御師匠の御前に持參致し、原本は御返し申して、拜寫したる御聖教を御覽に供した。法然聖人は、其取上げになつて、初めの一行に「選擇本願念佛集」と御書き遊ばされ、次の行には「南无阿彌陀佛。往生之業。念佛爲本。」と其下に「釋綽空」と御書きあそばされた。即ち、二行二十四字の大文字を御書添へあつて、直に御付屬なされた。わが聖人は、感涙の袖をしぼつて「是れ専念正業の徳なり、是れ決定往生の徴なり。」と御喜びなされたのも理である。自力根性の首切り刀の選擇集を拜領したる我が聖人は、己れ他力往生の大敵たる、自力執念のヒガ思ひを打切らでを

くべきと、非難攻撃を物とせせず、骨折り下さつたが、滿九十年の御苦勞である、御師匠の眼に見込まれたる聖人は、果して、御目に違はず、淨土眞宗の開山とならせられた。何たる尊いことで御座いませう。私は、曾て劇場に臨んで感涙したことがある。其は外でもない、かの判官が切腹の場所だ。彼すでに腹を切らんとして「力彌、由良之助は未だ來ぬか」「ハイ未だ參上仕らず」と答へ終るやをばらぬに、又重ねて「力彌、由良之助は、ハ、ハ、ハイまだ參上仕らず」「あゝ残念だ、最早是非に及ばぬ」とグット九寸五分を突込んだ所へ、一生懸命かけつけたのが由良之助で、只今由良之助參上致しました。と告ぐるなり、其聲聞いた判官は「待ち兼ねたぞ近う」と云ひつゝ血汐のしたゝる九寸五分、「これこの血刀を汝に渡すぞ」と差出した。由良之助は、押頂いて受取つた。かくて判官は、苦し

○選擇集の付屬……………

い臨終の聲を勵まして、「由良之助分つたか」「ハイ承知仕りました」
 彼はかしくまつて、しつかりとこう答へた。こんな奮劇であつたが、
 何と味ひのある事ではないか。それ御覽なさい、數多き家來の中で、
 血刀を授けられたのは大石たゞ一人である。己れ僧や高野師直其ま
 いでをくべきか、と一念こめた由良之助良雄は、猪武者と誇られて
 も、犬士と嘲れても、忠義一途に身をかためたる精神には、何でそ
 れらが感じを興へよう、非難攻撃の聲が高くなるほど、彼が心は愈
 く堅く動かなかつた。今も其と同様に、三百八十餘人の御弟子の中
 で、「南无阿彌陀佛。往生之業、念佛爲本。」の御師匠の大精神をこめ
 て、お書き遊ばされた信仰の選擇集を、御自分から御染筆の血汐を
 つけて、釋綽空に手渡しするぞ、とのお譲りを受けられたのは、わ
 が聖人第一人である。斯う云ふと、善惠坊、聖光坊、長樂寺の隆寛、

勢觀坊の方々も、選擇集の御付屬に預つて居るではないか、と他流
 の人は云ふであらう。爰が丁度、十不二門指要抄に、達磨の三傳を
 引いて、自ら、皮、肉、髓の淺深に分れて居ることを述べられてあ
 ると同じで、眞に、選擇集の髓を得たるもの、即ち、法然聖人の髓
 を傳へ授けられた者は、獨りわが聖人である。他の人々の授かつた
 のは、確かに皮肉の傳であつて、正しく眞髓を傳へられたものとは
 云い難い。わが聖人なる事の確證として三つをあげると、斯うであ
 る。先づ初めには内題の字。次には眞影の授與。後には、淨土宗開
 宗の勅書を附屬された。即ち是であつて、かの達磨が、我が髓を得
 たる者は慧能であると云つた如く、法然聖人が、わが髓を得たるも
 のは綽空ばかりであると認めて、お授けになつた様子が、此の三由
 によつてよく分るではないか。第一内題の字を、自らお書きなされ

○選擇集の付屬……………

○選擇集の付屬……………
て御付屬なされたのでも、大概その真意が知れやう。夫れから、同じ年の初夏中旬の第四日に、源空聖人の御眞影を授かつて、圖書し奉ることゝなつて、七月の二十九日に御壽像が出来上つたので、御眞に供すべく持參致した。この時法然聖人は、眞に筆をお執りあつて、眞影の上に讚をおかきなされ、なほ宗義相承の印狀を添へて、お授けになつた。其の讚は、若我成佛の文で、御自分の御名をかかへべき處には、源空とはなくて、南无阿彌陀佛とある。この六字を記し給ふたは、名號はみ親の御名ばかりでなく、我が名も亦其であるとの思召しである。

稱ふれば佛もわれもなかりけり

南无阿彌陀佛の聲ばかりして。

とある如く、一念の信心發得の上は機法一體にして、人を見るも我

れを見るも、南无阿彌陀佛の外はない。同一念佛の上は、身も心もお六字であるから、源空の假の名をやめて、わざと、往生の本體眞實のお名を記してお授與なされたのだ。讚の文は、善導大師の御釋文で、十方衆生が平等に佛になられるのは、十八願の御化導より外はないとの思召しで、往生禮讚の中にある、第十八願の釋文をお書になつたのである。時に大師聖人は御年七十三歳にして、わが聖人は三十三歳であつた。御印狀には「念佛證據のため、予が影を進じ候。」と云ふ御語があり、又その奥書には「釋善信坊に授く。」との御眞筆がある。されば師資血脈相承は、明かにわが聖人なることの證據である。序に云つてをくが、此時より綽空の御名が善信と改められたので、御傳抄に「夢の告げによつて綽空の字を改めて、同日御筆を以て名の字を書かしたまい畢ぬ。」と仰せられてある。第三に

○選擇集の付屬……………

○選擇集の付屬……………
は、源空聖人に下さつた一宗弘通の勅書を、わが聖人へ御授與あつた。で之を以て考ふるも、法脈相承は、確かにわが聖人へ傳へ給ふ思召が、師聖人にあらせられたことが窺はれる。其法然聖人の御添書に「こゝに去る頃頂きし、勅書は、つかの間も身をはなたざる淨土眞宗弘興の寶璽たり。今夜ひそかに貴坊へ授與せんと思ふあいだ。願はくば予が滅後、貴坊がはりて此一宗を弘通したまふべし、あなかしこ〜」。承元丁卯年三月十四日、源空御判善信房と書いてある。法然聖人五十四歳の御時、即ち文治二年八月十三日に、先帝後白川法皇本願、今上後鳥羽天皇より、源空聖人に對して、淨土眞宗開闢の勅命が下つてをつた。それを御流罪の前々夜、わが聖人に授與し給ふたのである。已上の三事によつて、選擇集の髓を付屬されたのは、わが聖人であつたことが大略お分りだらうとおもふ。彼の大石

か、主人の追夜に蝟肴、酒や舞子と墮落したのを、何の益にも立たぬやうに笑はれたが、彼には目的あつての道樂三昧、誘られても笑はれても、血刀受けた此身ぢやもの、一度は敵の首を取らずにをくかと、一心こめた良雄だから、人が何と云ふが構はぬ。自分が目的を達するため手段は百方自由で、一から十まで、敵打ちの目的に身も心も統一されて居たのである。目的の障害物と思ふたら、可愛い妻でも離縁をする。又反對に若しも其れが目的に進む助けとなるものならば、料理屋に連日でも、飲みくづれると云ふ有様。種々なる辛苦をなめながら、悪口雑言には耳もかさず、大事な目的を遂行するため、身を捨て、働いたが彼であつた。わが聖人は、御師匠法然聖人より、御染筆の血汐をつけて渡された、所謂法脈相承の心血つけた選擇集を受取つて、己れ地獄魂よ、自力執念の敵(迷ひ)

○選擇集の付屬……………

○選擇集の付屬……………

の首を打ち切つて、本願他力の信仰生活に生かさねばをかぬと、信心爲本の本願力に身を委ね、肉食妻帯の手段を以て、王法爲本の在家に陣取り、是れこのとほり、明け暮れ聴聞するならば、聞かさにやゝかぬの御慈悲があるから、必らず一度は、宿善開發の時至り、能發一念の曉天に不斷煩惱得涅槃と、美事に、自力執心の首を切落して、心も晴るし身もはるし、信心觀喜の新しい生活に入られるぞと、易行他力の道に引導したまふたのである。斯る大精神の發現より、御身の艱難辛苦も打ち忘れて、御苦勞遊ばされたが、わが聖人であるのに、如何に濁世とはいひながら、當時の人は、この大精神のあるところを知らずに、唯徒らに皮相の見えに囚はれて、アノ親鸞が居動を見よ、墮落を笑へ、衣を着ながら女房を持つたぢやないか、念佛唱へながら肴食ふぢやないか。佛法の規則破りぢや、教界

の面汚しぢやとのしられた。されどわが聖人は、そんな人言は何とも思ひ給はず、只自力執心の敵の奴を滅ぼして、信心觀喜のからどきあげ、光と力に統一されて、現在今日から、目的(證大涅槃)の彼岸に向つて、歩一歩、進み行く身の仕合せに、世の憂喜苦勞も忘れ果て、千辛もよし萬難も來れ、永劫沈没の魂を救はるゝ大恩を思へば、たとい、毒の中も辭するには及ばぬ、喜んで迎ふると云ふ、勇ましい生きた手本をお示し下されたが、わが聖人の御生涯である。かゝる聖人の御苦勞は、私共の自力不安の心を亡して、他力の新生活に、此世生存の意義を悟らせ、未來永々に無窮の光と力とを頂かせて、其日／＼をうるはしく向上させたいと、此の思召しに外ならぬ。私共は、かほどの大恩を忘れてすみませうか。報ぜずに居られませうか。

○選擇集の付屬……………

七。行信論と信心一異論

わが聖人が、選擇集の付屬を受けられたる精神、即ち、選擇集の真髓を得たまいたる精神が、正しく事實の上に顯はれたのが、同年九月二十日に於ける、信行兩座の一段である。この評判によつて、信心爲本の宗義が、本願固有の法義であつて、稱名は、任運隨伴の妙行であることが、明かに證據立てられた。だが、未だ信そのものが、智愚善惡の機によらぬ、一味平等の大信たることに暗い人があつた。そこでわが聖人は、此が最も肝要なところだ、決して假借すべきでない、何時か、之が論判をなさんものと、思召された。此の思召しが事實の上に顯はれたが、信心諍論の段で、即ち、翌年八月十六日の活舞臺である。抑々信心諍論は、他力回向の大信を證明する、即ち信心そのもの、根底が、自力である

か、他力であるかを決判する場所であつて、此の兩座の試判こそ、正しく決定往生の時尅が、信にあるか、行にあるかの問題であつた。されば、信行兩座の試判と信心諍論の判決とは、眞に、選擇集の眞精神を受け得たる、わが聖人の精神と、我が真髓を得たるものは、善信房より外にないと見込み給ひて、御付屬あそばされた師聖人の精神とが、相一致したる趣きがあつて、師弟平等の精神が躍如として、此二段（信行兩座と信心諍論とを云ふ）の上に於て、まのあたり拜見するやうな感じがする。實に、是れ吉水史上の花あり實ある活劇史である。もとより、信行兩座の段でも師弟一味の安心、信心諍論の段でも師弟一味の了解、誰が何と云ても、法然聖人の唱へ給ふた淨土宗は、とりもなほさず、わが聖人の勧め給ひし眞宗である。本典の教巻に「謹んで淨土眞宗を按ず。」の語を冠らせられたは、誠

○行信論と信心一異論………

に、由あることであると思ふ。

○第十八願の天下分目……………

八。第十八願の天下分目。

唯信獨達の法門、絶對他力の信仰を明かに示されたる、第十八願の深意を誤つて、眞に、王本願の願底を窺い得るものは、甚だ稀であつた。此に於いてかわが聖人は、第十八願の眞面目をば打ちだして、信心成就の願と定められ願意の奥底を聲明された。全體、第十八願には、三信と十念との二つの願事が誓はれてあるのに、何故、十念をさしをいて、唯一つ信を以て、本願の體を定められたのか。此の疑問は、第十八願の願底を叩いてみれば、直に解るのである。そもく第十八願には大信（至心、信樂、欲生）と、大行（乃至十念）の二つの願事をあげて、此の信と行とによつ

て、衆生の往生が出来ぬならば、正覺はとるまじとの誓ひである。今此の願を、此の願成就の文に照し合せて見ると、乃至十念の念佛は第十七願成就に説き、若不生者の往生は第十一願成就に説いて、第十八願成就には信心の一つを説いてある。かやうに、成就の文より推してみれば、第十八願は、唯信正因を誓はれたる信心の獨り舞臺である事が、よく分つて来る。由來、私共の無智、無力、無能を見込んで、其まゝ救はんとの大誓願の下に成就し給ひたる、本願成就であるから、尅果の一念は唯、信心の一にあつて、行をまたぬは明かなことである。月に向ふ露には必ず、月の光が映る。如來に向ふた私の心の上には、必ず如來の信實心が現はれて、自ら、得涅槃の光に導かれて參るのである。私共は、如來の私を信じて、救ひ取

○第十八願の天下分目……………

○第十八願の天下分目……
 の眼を以て御光を拜ひことが出来やうか。光のみゆるるのは、やはり光の力である如く、私共の信念は、如来が私共を信じて、其み光を仰がしめ給ふ結果である。されば、唯一如来を信ずる信念は、ともも直さず如来の至心と、其靈能の御光と、無限の生命とが、私共の心に印現したる力用に外ならぬのである。嗚呼、何たる尊い信仰であらう。私共は、私の上に願はれた信念を輕んじてはならぬ。巨大なる汽船が、安らかに私共を乗せて彼岸に送る時、私共は、乗船によつて四方の景色を眺め、乗船によつて渡り難い大海を渡行くことを、樂みかつ喜ばずには居られぬやうに、唯だ、如来を信ずる一念の願船のみが私共を、證大涅槃の彼岸に到らしむる力あり、光あるものであると氣付いて見れば、如何して、此信念を喜ばずにするやうか。かゝる大悲に促されて、どうして、我情をはつて、小言を云つ

ておられやうか。あゝ有難い、仰いで信ずる處に、平和の光が輝いて下さるもの、區々たる感情に拘泥しては居られやう。わが聖人は、此信念を四十一位の觀喜地に配して、不退の菩薩であると、讚めさせられてある。かやうな由れがあるから信仰上の生活は、日常すべての事柄物柄が、皆有意的に、感謝的に、報恩の大作となるのである、わが聖人が信仰の得益に十種を表明かしたは、全く、この意味である。處が或る一部の人は、左様に信ずるばかりで往生が出来たらば、十念の行を添へる必要はあるまいに、十念の行を添へたまふてあるのは、やはり行業を待つて因種を整ふる譯がある、と主張するものもある。蓋し此らの説は、無限の大悲に觸れぬ所以であつて、しかも、十念の誓意に體達せぬからである。今畧して、十念の誓を添へ給ふた、願意のほどを一言述べてをく。十念を誓は

●第十八願の天下分目……
せらるゝには、大なる二つの思召しがある。その一つには、若し乃至十念の誓を立て、おかぬと、信心に必具する、任運随伴の易行に違ふことが出来ぬからである。二つには、平生業成の旨を知らさんために、乃至十念の作即無作の妙行を添へて、誓はせられたのだ。では、稱名は往生の因ではなく、全く、信心が正因であつて「不思議の佛智を信ずるを、報土の因としたまへり。」の思召しがよく分る。さればお互に、信心の正因を得ることが、何より肝要である。斯う云ふと、往生の因でない稱名（乃至十念）なら、信心（至心、信樂、欲生）と一處に、若生者の中に何故をくか。若生者（往生）の管内にある以上は、稱名も亦往生の因と取つて差支へないと云ふ者もあらう。此等の説明は拙著、「通俗佛道講話」下巻、第十八願の下に、委しく辯じてあるから。御縁があるならみて頂きたい。今は略

してをく。上來述べたとほり、第十八願には、信と行との二つが誓ふてある。そこで、私共の往生の定まる時節は、其信じた時か。稱へた時か。何れの時に決定するかの問題の下に分れたのが、信不退の座と、行不退の座の兩座である。之ぞ所謂、第十八願の天下分け目の場所である。信不退と云ふのは、稱へた時に往生が定まるのではない、信じた時に定まるが他力往生である。佛の手許に仕上げた、南无阿彌陀佛を、機に貰ひ受けたが信心であるから、信心が正しく往生の因で、稱へる稱名は、全く決定往生の相ぶりで、乃至の二字を冠りたる大行は、即ち、一多の情執を脱却したる大行で、作即無作の妙行である。それで、第十八願は信前行後、信じた時が即ち不退の位についた時で、此時已に、往生は決定と立つるが、信不退の立場である。一日わが聖人は、師の法然聖人に御尋いなさるゝやう

○第十八願の天下分目……

○第十八願の天下分目……
彼尊の御化導を被りたる門人は澤山だが、眞實に、報土得生の信心が、一味の安心になつて居るでせうか。私は、同室の好みを結んだ所註には、どうか一度、各自の心中を打明けて、諸共に手を引きあつて報土往生を遂げらるゝ、一味の信心になり得てゐるか、否なかを試みたく存じますが、此義は如何でございませうかと、御尋ねした、師聖人は、なるほど結構な思ひつきだ。では明日決行しなさいとの、仰せであつた。扱て、其日となると、多くの御弟子方が参られたので、やがてわが聖人は、口を開かれて、今日は信不退の座と行不退の座とを両方に分けることになつたから、各々御心得のまゝに、何れの座なりとも御着き下さいと、帳簿と硯とを用意して、各自の意向を尋ねられた。御弟子の多くの顔色が變つた。何れに着いたがよからうか。御師匠の御思召は何方であらうか。あの人は、此

の人はと互に顔を見合はせて、眞味を心得ぬ風體であつた、斯くて第一番に、發言されたのが聖覺法印、で自分は信不退の座に着くべし、と大聲に答へて着座した。次に、同じく自分も信の座に列るべしと、呼んだ人は白川の信空上人であつた。時に、遅れ馳せに参つたのが彼の法力坊である。彼は事の容子が日頃と違つて、而も、座敷が両方に分けられてあるのに驚いて、息せき切つて、執筆の趣きを問ふた。わが聖人が、今日の次第を述べらるゝと、彼熊谷は、聞き終るなり、然らば私は信の座に参ると、何らの造作もなく其の座に着いた。諸君どうです。彼がこのやり方は、見のがしてならぬ逸事ではあるまいか。聖覺法印とは、なか／＼立派な方で、後白川天皇の御前講を拜命して、大無量壽經を講ぜられた程の、偉い人である。で、わが聖人は、其御製作にかゝる唯信鈔をば、特に御愛讀遊

○第十八願の天下分目……

○第十八願の天下分目……………
ばされて、唯信鈔文意と云ふのを書きなされた。最も、わが聖人
には兄弟子で、而も、一味の御了解であつたからして、むしろ、信
の座にお着きあつたは當然のことである。又信空上人は、京都檀王
寶林寺の開基で、其著述の數ある中にも、後世物語は、大したる傑
作である。であるからわが聖人は、常々、御引用あつて御喜びなさ
れて居た。而して唯信鈔と同じく、眞宗法要の中に加へられて、大
切な聖教とせられてある位で、上人が信不退の座に着かれたのも
亦そんなに不審はない。處が、不思議なのは彼の法力坊、熊谷であ
る。御繪傳で拜んで見ても分るやうに、随分と周章た恰好であるで
はないか。笠も杖も投げたまゝ、ぬいだ下駄も亂れたまゝ、椽端に飛
上つて、聖人の御執筆の理由を聞いてゐる。そして御答へあつたわ
が聖人の言下に、何の工夫や思案もなく、信の座に着いた。群集の

御弟子は、等しく意外な感にうたれた。諸君よ、諸君は彼がこの舉
動を如何に思ひますか。實に突飛であつて、一座の異彩を放つてゐ
るでせう。今更ら申すまでもないが、彼は、千軍萬馬の中を往來し
て、一代の功名をかこち得た、坂東一の剛の者ではあるが、しかも
學問と來ては御話にならぬ幼稚であつた。そして、歴然たる大學者
と世人に許されてゐる。善惠上人などの先輩を超へて、何の苦もな
う信不退の座に着いたと云ふは、何故でせう。たとい暫時は考へた
にもせよ、かゝる重大な問題を、早刻、信の座に參るべしと、立派
な決着の出來たのは、確然不動の抜くべからざる信心が、平生のう
ちに産みつけられて居たからである。かく熊谷が即決の出來たこと
は、吾々にとつて、又よく味ふに値することだ。彼は陣頭に立つて
幾百萬の兵卒を指揮し、敵軍を慶殺し、悲惨な巷に彷徨つて、彼我

○第十八願の天下分目……………

○第十八願の天下分目……………
の死傷者を目撃し、其上に、大恩受けた主人の命息を手にかけて殺害した。斯る罪惡が鼓動して、あゝ何と云ふ恐ろしい心中であらう。鬼にまされた此の直實が、生きながら無間地獄に落ちぬも不思議だと、罪惡深重の我身の上を思ふ度毎に、身の毛もよだつほど、罪を怖るゝ心が切實であつた。かくも極惡深重の自分であつて、而も、煩惱の焰を吐き出して居る此口で、百遍や千遍稱へた力で安心しやうとした處で、容易に、否に到底安心の出来るものではないと、狂い悶えて、はるゝと上京した熊谷だから、法然聖人の教に預るなり、南無阿彌陀佛の力に安心した。かう云ふ工合で、南無阿彌陀佛の力を、心一杯腹一つにのみこんで、ヤレ嬉しやと、稱へあらはす念佛の生活であつたから、何の分別工夫もなく、平生安心してゐる其儘、即ち、産みつけられた信心が其まゝあらはれて、信の座につ

かれたのである。聖光坊は學者であつた。被は無學であつた。自分が修めた、智慧や學問を鼻にかけて入つた聖光坊と、持參すべき學識もなく、唯罪惡深重を如何にせんと、この赤裸々のまゝに飛込んだ法力坊とは、是れ實に、私共が捨機托法の指導ではあるまいか。私は曾て聞く、禪宗の大法は、一宗の師表とも仰がるゝ學者、神秀なる人には傳はらずして、却つて、無學なる、而も、一の米搗きであつた慧能其人によつて傳はつたと云ふ。見性成佛の宗旨でさへも、此通りではないか。況んや、他力往生の法門じやもの、智慧や學問の持ちもの目にかけてゐて、如何して、眞實の願力が得られようか。歴々たる知者や學者も、師弟一味の信の座に着かなかつた中に無學な蓮生坊が、信不退の座に着いて師弟一味の肩を並べる、一蓮托生の仕合せを得たる喜びは、私共が、今に想像する限りでなかつ

○第十八願の天下分目……………

○第十八願の天下分目.....

たに違いない。念佛の大法は、善惡智慧の器量は論ぜぬ。如何なる人であらうとも、自心の計ひを打捨つる者であつたら、必ず傳つて下さるゝが他力本願の約束である。で、學者で着かれぬ信の座へ彼が直ちに着いたのは、決して訝るに足らぬ。確かに其根底は、佛心から生へ出て居つたに相違ない。全く、佛の力に全托したる自然法爾のあらはれである。處が、たまには、熊谷のやうに戰場に立つて多くの人を殺して居る者は、人に勝れて罪があるが、吾々は、殺人や惡事や餘計な罪を造つた覺へはないと、よい加減な理屈を並べて得手勝手な逃げ仕度をする人が、ないとも限らぬが、然し、それは大變な了簡ちがいな人で、實に氣の毒だ、私は、私共の心の所作ぶりから調べてみると、實は、熊谷に幾倍まさつた大罪人であらうかと、さう思ふ。諸君よ、自分の罪には氣付きませぬか、罪に泣いた

彼は、自力に死んで他力に生き、無常に悶えた果ては、念佛によつて、常住の蓮生坊と一轉した。苦しむ後には必ず樂みが来る。惱む人には屹度救ひがある。だが、強いて苦を求めずともよい、惱みを望むにも及ばぬが一度び、自己が内心の歴史を緝く時は、苦しい思は湧いて来る。心と心の衝突は、好まぬ不安な念を惹起して、人知れぬ恨みに泣かされるやうになる。諸君よ、且らく内的方面に向て、暗黒世界（心の奥底）を見よ。而し、自分の目では自分の顔の分らぬやうに、自分の心では自分の心が分らぬから、一番奮進して、如來大悲の光明をうけて、わが心の状態を調べてごらん。其時始めて、第二の熊谷は私であるかと、必ず合點する時が来る。世には、一家の浮沈にかゝる事件の起つた爲めに、飯も食へず寝もやらずに、心配苦勞する人があるではないか。今云ふところの生死出離の問題は

○第十八願の天下分目.....

一家の浮沈どころではなく、全く自己自身の永世の問題である。永々無窮の生死問題であるのだ。此の一大問題が、わが身の上に横はつて居ることに氣付いたら、如何して悶へずに居られやうか。世は無常である、我が身も亦た無常であつて、明日をも知り得ぬ、一寸先きは暗ではないか。身にも世にも限りがあるが、限りある身柄世柄のそれに、限りのない煩惱は續々起つて来るではないか。虎狼のやうな恐しい私の心は、益々競い起つて来るではないか。此に一點氣付いたら、今の私は、昔の熊谷に勝つた大悪人であると、驚かすには居られぬ。驚いてみれば、どうして馬鹿落ちつきに沈着ておられませう。ヤレ一大事と、苦悶の巷に狂ひ出すは當然で、第二の熊谷が飛び出して来るやうになる。扱て、お話をもとに返へして、第三番目に、信の座に着いた彼の後には、誰あつて音沙汰もないから

我が聖人は、御自分の名を御記しになつた。こゝを御傳抄に、……茲に數百人の門徒、群居すと云へども、更に一言をのぶる人なし、これ恐らくは自力の迷心に抱つて、金剛の眞信に昏きがいたすところか。人みな無音のあひだ、執筆上人親鸞自名をのせたまふ。と仰せられてある。彼れ是れ、時間を費やすうちに、御師法然聖人は次のやうに大命した。「源空も、信不退の座につらなりはんべるべし。」と。時に、參集したる人々の中には、或は屈敬の氣をあらはす人や、あるは、懺悔の色をふくむ人の多くが、意外の感じにうたれてゐた。この試判の信行兩座に於いて、師の聖人の念佛爲本は、自らわが聖人の信心爲本であつて、師資相承の誤りなきことを證明して居る。諸君、何と味ふべき所ではあるまいか。惟ふに、彼れ三百餘人の門弟が、かくも血相を變へての窮態を演

じたのは、是れ全く心の人であつたからではあるまいか。若しも彼が口の人であつたならば、少くとも数年の教育を受けし彼等の多くが、かくまでも口を閉づるの筈はなからふ。今日、心に確乎たる決着も無くして口を立派にする族は、大に注意すべき所ではあるまいか。されば互に口の試判を且らく置いて、心の安座は何れに決着せしかを、心の人となつて語りたい。噫。

九。争ひの光景。

信行兩座の出來事 撰集の血刀を付屬された、わが聖人の初舞臺で、自力念佛の首を切つて美事に、第十八願の天下は、信心成就の領地となつた。終日能行すれども所行海を離れぬ念佛往生の、眞意を顯はしたが、もう一つ其信心に、自力の信と他力の信との區別が、未だ明かに分つて居らぬので、第二の争ひとなつた。

是が、所謂信心諍論の段である。○信行兩座に於ける信不退の信は、他力廻向の信である、と云ふことを明かに顯はされたのが、信心諍論の一場だ。わが聖人は、自己一身についての諍ひならば、無論なざる筈はないが、一切衆生と諸共に報土往生が遂げたいとの思召しから、我れを御忘れあつて、諍論なされたのである。古語にあるやうに「文王一度瞋りて天下平なり。」で、わが聖人が、大變に瞋りなまつて諍はれたお蔭で、末世の今日の私共が、頼む心は他力廻向の賜である、と、明瞭に喜ぶことが出来るやうになつたのだ。建永元年八月十六日、わが聖人は日常の如く吉水に參つた。處が已に、聖信房、勢觀房、念佛房などの人々、以前より座にあつて、やがて御法話となつて、念佛房の云はるゝには、同じ淨土を願ふて、共に往生を期するとは云ふものゝ、凡夫の信心は誠が少いから、自

分たちは何時、御聖人の様な御信心を得て、安心して往生が喜ばれるであらうか。とがうであつて、談は、終ひに信心一異の根本問題に這入つた。而して、一座の人々は、彼念佛房に同意するのであつた。此時、いやさうは申されないと、わが聖人は不服を唱へて、反對した。諸兄は、兼ねて師聖人の御教誡を承りながら、何と云ふ御心得ちがいなのでせう。そもく信心については、師聖人の御信心も、この善信が信心も、決して變る所はないと、斷乎として口を開かれた。時に、勢觀房は進み寄つて、今の善信房の仰せも如何も合點のゆかぬ御安心、云ふ迄もなく師聖人は、碩學宏才、專修念佛の元祖、淨土の大師ではないか。貴殿は門葉の末弟として、師聖人と同一の信心とは、近頃以て心得がたい仰せ、そんな我慢はあやしなさいと、切つて出た。わが聖人は、上足の勢觀房、先輩の仰せと

○争ひの光景……

は云ふものゝ、爰は、決して遠慮すべき處ではないと、更に進んで申さるゝ様、否な勢觀の御房よ、善信の智慧や學問が、師匠の智慧や學問と變りがないと云ふのなら、其の答めは尤だ。大師聖人は、深智博覽、學徳秀でたる、智行全備の御方で、善信は云ふまでもなく、短才淺見の末弟である。智や學や徳の聖人と等しいと云ふのならば、其の答めも無理からぬが、今は、そんな話ではなく、唯往生の信心は、御師の信心もこの善信が信心も、如來より賜はる信心で、毫末も機の造作をいれぬ信心であるから、同一平等で、聊かも差異はないと申すのである。師の信心だから勝るの、弟子の信心だから劣ると云ふ、そんな差別のある信心は、私の力を用立てする自力の信心である。一度、他力信心のことは承はつてからは全く、私のない安心でなくてはすまぬ。聖人の御信心も、他力より賜

○争ひの光景……

らせ給ふもので、善信か信心は亦他力であるから異ふ處はないと云ふのだ。と嚴然として言ひ放ち給ふた。居並びたる一座の衆僧は、互に顔を見合せて、誰か、これを説破る者はないかと目配りしてゐる中に、又々善信房が、一層乗出して、わが聖人に喰つてかゝらうとした折柄、奥の襖を開いてお出ましなされたのは、大師聖人であらせられた。法然聖人は、諍ひしてゐた人々に向つて、絶對の御判決を下し給ふた。今、其を御傳抄によつて、要領を述べると斯うである。抑も、信心に其差別をみるのは、自力了解の信心で、自力の信は、智慧が各別であるから信も亦格別である。自己の機力を勵ます信心には、自ら、淺深厚薄のある事は勿論である。今日、この源空が勤むる信心は他力の信であるから、智愚を論ぜず、善惡も云はず、同一念佛無別道故であつて、各々方の信心も、自分の信心も

○争ひの光景

只一つであつて聊かも變りなく共に、如來より賜はつた信心故、源空が信心も善信房の信心も、更に異るところはない。自分が賢いから信ぜられたのではないので同一であるのだ。で、若しも信心の變つて居る人は、自分が參る淨土には、よもや參ることは出来まい、克く御心得ありたい。とかやうに、懇切なる御論しに預つたので、善信房をはじめ同志の面々は、みな舌をまき、口を閉ぢて止んだと云ふ。選擇集に、雜行は回向の行、正行は不回向の行と、お示しなされてあるが、淨土參りについて出されるものは、他力回向の南无阿彌陀佛より外、差し加へするものは何に一つないとの御安心が、師弟一味の他力信心であつた。信行兩座で、御師匠と一蓮托生のわが聖人は、今また信心諍論に於て、善信房や勢觀房の自力心の首を切つて、源空が信心も、善信房の信心も、更に變るところある

○争ひの光景

べからず、只一つなり。」との判決を蒙り、師聖の人と同一平等に大
悲を味ひ給ふた。私共は、生きたるこの御手本によつて、よくく
味はねばならぬ。私共も亦同じく他力回向の深信によつて、わが聖
人と同様に大悲を味ふて、彌陀同體の涅槃に到るべく定められた、
私の仕合せは、何たる無上の光榮でせう。以上の二段は私共の標本
であり、又聖人傳紀中の花である。

第五章 法 難

一。火蓋きらる。

吉水の禪室は、今や念佛の花盛りである。東から南
から、我もくと上洛する人は、比叡や奈良を尋ねる者はなく、北
する男も西する女も、東山の噂さ、吉水の沙汰の持ちきりと云ふ有
様だ。で、其盛大なる状を見聞する他宗の僧徒は、寝て居る屋上に

○火蓋きらる.....

火の起つたやうな驚きで、彼所にも會議此所にも密議、如何にして、
吉水に閉門をさせよう、どうしても解散させねば、自分らの腹が癒
えぬ、と叡山は権利上から、奈良は教化によつて、高雄からは教理
の側、無法にも三方よりの攻撃の矢は、吉水の禪房に放たれた。之
れ、是非もなき次第にて、月に村雲花に嵐は、今も昔も免がれぬ婆
婆の慣しである。南都北嶺對吉水の諍論が、初めて史上に現はれた
のは、音に名高き大原談議で、皆人のよく知る處であるが、其處も
吉水の威風堂々たるに驚いた山法師は、遂に元久元年の冬、腕を扼
して起ち三塔會合して、茲に、吉水に向ひ専修念佛を停止すべき、
山門の會議は比叡の大講堂に開かれ、満場一致を以て可決した。で、
先づ座主眞性の許まで訴へ出た。かくと耳にせられた法然聖人は、
直に、起請文及び、七ヶ條の誓詞をお認めあつて、彼眞性に送りて、

○火蓋きらる.....

○火蓋きらる.....

會議の誤解を説き、また其疑惑を拂ひて、他意なきことを示され給ふた。之れ實に、元久元年十一月七日であつた。此時、わが聖人は御自名を、第七十九番目に署せられた。かくて吉水も、一時の小安を得た。然し、政界またあだやかならずして、二代將軍頼家公は、修占寺に於て殺されるなど、天下に事の多かりし年も暮れた。明け二年の三月には、選擇集の御付屬があつた。同年七月二十七日には、わが聖人は、からずも、月輪殿に於て、比叡の座主に出合つて、彼より種々法門の問ひをかけられた。が此時、わが聖人は一言の辭ひもせず、品よく其座を逃げて歸つたと聞くや、吉水の同侶は、其意氣地なきを憤慨し、一方山法師らよりは、善信はとるに足らぬと嘲笑された。會つて、宮中逆修の折節、雄辯滔滔々と、聖淨二門の廢立を論じ、唯の一步も彼に譲らなかつた聖覺法印と、今回一言の

申しひらきもせず、逃げ歸つた善信房、即ちわが聖人とを比較して、人々は是非の批評をとり、にして居た。然し、諸君よ迷ふてはならない。御覽よ世に名ある「興御書」と云ふ、大師聖人の御感状は、人々に褒められた聖覺法印には下らずに、却つて、人の笑ひを買ふた、わが聖人に送られたではないか。其文に次の如き御言葉がある。「昨日、殿にて座主の御坊へ參會、法門仰せかけられて誹謗し給ふ由承り候不苦候。餓鬼は水と火と見候。自力根性の他力を知らせ給はぬがあはれに候。たゞ源空が痛む所は、門徒と稱する人中に、不思議を（一本には「申すらし」の語を加ふ）源空が教へ候と云へるが淺間敷候。常に申す様に、淨土宗のこゝろは、機は十方衆生、心はたすけ給へと思ふばかり、行は一念も十念も決定往生也。佛願に順ずるが故にと相承する外に、全く別の法行（一本行を門に

○火蓋きらる.....

○火蓋きらるる……
作る)の示しもなし。(中略)向後も、座主などのいらせ給ふ處をば
逃げ歸らせ給ふべく候。空賢、比叡の攻撃、禁庭及び、月輪殿上に
於ける彼我の衝突、事體月に日に急塞を告げ、危機は眼前だ。まし
て高尾の山氣は、既に吉水に肉迫せんとする風雲である。で大師聖
人は、斯の如くなりし上からは、與ふべきものは與へ、授けるもの
は、早く授けておかぬと大變だと、思召されたか、同月二十九日に
は、御壽像に、南无阿彌陀佛と、若我成佛の文とを御染筆遊ばされ、
尙、宗義相承の印状を添へあつて、わが聖人に授け給ふた。南都
北嶺の外患ある中にも、依然として吉水の天地は、念佛の聲に時を
移して、法義の相續に餘念なく、已が運命の今や風前の燈に等しき
も忘れて、九月二十日には、信行兩座の試判が開かれたと云ふは、
何たる尊い、而して有難い事であらう。叡山が、念佛停止の起訴を

企てゝから、僅か一年立つかたゝぬに、又しても、笠置は彈劾奏狀
をなすべく、十月に入つて果然、解脱上人の吉水彈奏案の筆を起さ
れた。茲に、明惠上人の抗議ぶりを、一言して置く。上人は、法然
聖人に對して、十六種の失をあげて攻撃されたが、其第一には、善
提心を以て往生安樂の行とせぬのが過ちだ。そもく佛道を修行し、
往生を願ふ者には菩提心がなくてはならぬ。聖道門でも淨土門でも
衆生の濟しく求めるところは、菩提涅槃の妙果である。で其行業に
異ありと云ふとも、菩提心の心體は同一でなければならぬ。若し善
導の正意が、果して菩提を助業として、稱名を正因とする思召しな
らば、何故、疏の中の正因を標榜する處に、常に菩提心をあげて、
稱名を出さなかつたらう。觀念法門に、般舟三昧經を引き終りて、
入道場三昧の法を説いて、「晝夜に心を束ねて相續して心を阿彌陀佛

○火蓋きらるる……

○火蓋きらる.....
に専らにして心と聲と相續せしめよ。」とある、之れ、正に善導の本意、稱名の下には必ず心念を具するてふ、動かすべからざる確證ではないか。されば稱名は必ず、菩提心より生ずる起行業である事は明瞭なのに、汝は、唯聲聲（菩提心）をすて、業聲（稱名）のみを取らうとするのは、ちよど、火を離れて煙を求めんとするも同様だ。之れ、明かに内心は淨土の正因で、往生の業は、決して汝の云ふ如き口稱の念佛ではない。と事ふ意味で辯じてある。（以下は略す）念佛と菩提心との聖論は、實に、底止する處を知らず、破竹の勢であつたが、其に明確なる判断を與へた人は誰あらう、獨りわが聖人である。

ふがある。昔から宗旨を開く者は、皆口授相承だ。近くは、傳教弘法も入唐して法を求めてのち、歸朝して天台眞言を開いた。然るに法然は先輩の口授もなく淨土宗を開くとは、全く、彼一個人の私見である上に、未だ勅許もないのに、公然と法を説いて、而も、釋尊一代の聖教は、彌陀一佛の稱名の中に歸する、などと勝手に誇つてゐる、があれは正しく、邪見の宗旨だと云ひ（中略）而して、その第九條に至つては、國家を破壊する賊者として、速に、源空を罪せられんことを上奏すると云ふ趣意で書いてある。即ち、彼が勸むる専修念佛の教へは、破戒の者も造罪の者も、念佛を唱へさへすれば、念佛の力で、罪ありながら障りかへ乍ら、往生が出来る故、罪の沙汰をするには及ばひと説く、で、彼の教へは第一法を亂す勸めてつまり國家を危くする、所謂放縱主義の宗教だと切込んでいつた。

○火蓋きらる.....

要するに、以上をつつめてみると斯うである。當時、宗教界の権利を占めてゐた叡山は、正面より權到によつて、念佛停止の義を朝廷に迫り、高雄は理論上に立つて、法然坊の勸むる淨土門は、宗教を無視したる私見だと、十六ヶ條の抗議を申込み、南都は勸化の上から、他宗を廢して念佛を勸めると云ふは單に、佛敎を破るばかりでなく、終には國家を亂す罪があると、九ヶ條の罪狀をあげて、各々朝廷に奏問した。風雲急を告げて警報は頻りに傳はる、吉水は愈々危機の場合に陥つたのである。かく三面より攻撃の筒口は向けられて、已に最初の火蓋は切られたが、交戦相手たる吉水に對しては、未だ、陛下より何等の宣命が下らなかつた、と云ふのは、法然聖人の信用が深かゝつた爲めである。

○火蓋きらる.....

二。鹿ヶ谷物語。

元久元年、叡山の僉議があつて已來、宗教に對する迫害が諸方に起り、高雄の抗議、南都の彈劾と云ふ風で「佛説に信謗あるべし。」の金言は、今や事實の上にあらはれた。人の出入も心安からぬ折もかまはずに、なほ吉水の鐘の響は、諸行無常の音と共に、昨日も今日も勇ましく且暮不欠の動行に、み法の流れもいと清く、念佛の聲は堂に瀝んでゐる。かゝる中にも、何時しか元久三年の、否な、改められて建永元年となつた。こゝに前關白藤原兼實公の幹施に依り、他山の彈劾も聊か和らいで、八月を迎へた十六日即ち、私共の信仰を決し給はれし一大活動の記念日たる、信心淨論の秋は、有難き記憶を吾人に殘しつゝ、其年も早や暮に近いたが、あらう事か、爰に大悲劇が突然に起つた、之が、謂ふ所の鹿ヶ谷物語

○鹿ヶ谷物語.....

○鹿ヶ谷物語……
の一條である。建永元年十二月、後鳥羽院能野へ御臨幸の留守中、宮中の女官にして松虫（十九）鈴虫（十七）と云へるが、鹿ヶ谷に於て、住蓮、安樂の兩坊によつて、尼寺となつた。處で比叡や、奈良、高尾には却つて、之が、吉水に於ける攻撃の動機を強めて、一層その度を激烈ならしめたのである。と云ふは、陛下熊野より還御あらせられ、事の由をさこし召さして、叡慮のほど斜ならずと知りたる、南都北嶺の僧徒は、時と來たれと勇み立ち、此機を失せず、吉水解散の火花を散さんものと、彼等山法師は、コブシを堅めて騒ぎ出した。そも此鹿ヶ谷は、納言成親や、平判官康親らが、法皇の旨を承け、俊寛僧都の莊にて、平家覆滅の謀を企てた處である。されど謀は敗れて、法皇は城南の離宮に、幽閉の御身となり給ひ、僧都は鬼界ヶ島に流され、其の後、法勝寺の山莊は、訪ふ人もなく

堂宇は荒れ、庭内には雜草茂りて、見る影もなき有様と變つて居た。然るに、如何なる因縁ありてか、此所に住蓮安樂の二人が居住するやうになつて、別時念佛の業を創めた、で久しく閉ぢられてゐた山門は、茲に、復び開かれて、俄に舊の如く人の氣しげく、六時禮讚の聲は、日夜の分ちなく幽谷にひびき、磬鉦の音は念佛と和して、月に日に、教化の光を増してゆく。頃は土御門天皇の、建永元年八月十五日と傳ふ。かの法勝寺に、法然聖人の招聘して、別時念佛の法要を修められた。かくと聞きたる洛中洛外の老若男女は、我れもく、と參詣する折柄、後鳥羽上皇の寵妃たる、鈴虫の局松虫の局の二人は、清水の觀音に祈願をかけての歸るさ、夫ら往來の人によりて、事の次第を知りたるが、そもく鹿ヶ谷に詣づる緒となつたのだ。一たび、法然聖人の懇ろなる御教化出家功德經の講話に耳を傾

○鹿ヶ谷物語……………
 けて、有難涙に咽んだ彼の二女は、その後深ひ想ひに沈んで了つた。が程へて、暮も迫りたる十二月二十六日の、而も真夜中に、まだうら若き二人の美女が、一道の光に導かれつゝ、人目憚りながらも鹿ヶ谷の柴門を叩いて、住持に面會を求た者がある。彼等は座に着くや、曾て、聽聞したる法悦を述べ、次いで、かく夜中を忍びて参りし譯を物語り、何卒、今宵私等を出家となし給はれかしと、ひたすら願はれる。で住蓮安樂は兩妃に向ひ、是はしたり、何と仰有るの抑々わが浄土門は、在家出家、智慧老少、男女善意のはかちなく、其まゝで往生の出来る他力教である。それで、出家するにも及ばず、尼になることも要らず、生れつぎ本業のまゝに、往生の出来るが彌陀の浄土である。今、御兩女の御心は、誠に殊勝ではあるが、出家發心、捨家棄欲はもとより聖道門の教で、浄土の教は外相は云はぬ。

唯御慈悲を喜ぶが肝要ゆへ、とてもかくても、念佛を唱ふるが誠の發心だから、此まゝ御歸りあれと、懇切に諭されたが、思ひ詰めたる女心の、さらばと歸る氣合は毛頭ないのみか、どうあつても、是が非でも尼になしてと、頻りに承諾を促すのと、其決心の堅くして動かぬと知りたる、かの住僧は語を改めて、では一先づ其裏に歸られて、帝の御許し得た上ならば、何時でも御望みを叶へて進げよう殊に此頃は、わが浄土教の繁昌につき、南都北嶺の嫉みをうけて、禁裏讒訴の拆柄なれば、何卒事の道理を聞き分けて、戻つてゐて貰ひたい。その中、吉水の御師匠にも伺ふて、御相談を申上げ、其上で、追つて御取計ひをいたさうと、言葉をつくして復心をすゝめた。二女は返す語もなく、暫時考へた末に申す様、では仕方がありませんから、大悲のみ親に直々の剃髪を願ひませうと、斷つて自殺の決

心らしい。で流石の住蓮安樂の兩僧も、此場に及びて止むを得ず、彼女等の乞ふに任かせて、爰に、丈けなす黒髪を落して、一夜のうちに、新しく妙亭・如智と云ふ麗はしき尼僧は生れたのだ。かくて、紀伊の山奥に姿を隠すべく、未明の内に鹿ヶ谷を發して、尼僧の影は旅に消えた。

三。あゝ吉水。

仙洞御所では、二人の局が姿をかくして了つたので、夜を日についで、所々方々と在家を詮儀したが、更らに分らず、如何せんと打案じて居る折柄、御鳥羽上皇、熊野より御還行あらせらる。然して、御寵愛の女官、鈴虫松虫の兩人が、行衛不明となつた事をきこし召されて、少なからず御嘆きあり、且つ御怒り遊ばされたまふ。其後、誰言ふとなく世人は傳へて、彼の女官は、吉水の法

○あゝ吉水……

然聖人によつて、出家したと云ふ噂が立つた、この事一度は主上に達するや、上皇は大いに憤らせられ、一方南都北嶺にては、かくと耳にするなり、好機は來れり今や猶豫すべからずと、吉水解散の意見を、層一層主張し出した。しかも、興福寺の僧徒は、更に僉議の上、終に表を朝廷に上り、具に、吉水の罪狀を訴へた。陛下の逆鱗衆徒の奏訴、危ふかりし導火線は發して、霹靂一聲、念佛停止の制札は、都の要所々々に建てられた。時は、建永二年二月四日である。因に、陽明門前の制札は次のやうであつた。

「今度、南北之擬奏達叡聞、諸宗之依怙依人心之謀、茲源空師自文治元年頃始而興淨土門、老少悉捨家業、剩法外科五十餘、依之、淨土念佛被禁止、猶一聲停止之。依面制書如件」。

建永二年は承元々年と、年號は幾度となく改められても、改まらぬ

○あゝ吉水……

○小松谷の消息……………
のは、人の心の亂調であつたのだ。思ふに、南都北嶺對吉水の衝突は、公然、朝廷の干渉にわたつて、急轉直下、女官の出家を動機として、茲に、吉水に對する最後の判決は下つた。安元々々年、法然聖人四十三歳の春、黒谷を出で給ひて吉水に入られてより、已に三十有三年の間傳へたる、平等大悲の清流は、中絶されて了つた。
四。小松谷の消息。

吉水が閉鎖されてから、師の聖人は、月輪禪定兼實公の斡旋にて、程なくして、小松谷の草庵に移らる。頃しも其月の二十八日、無勅寺の前大僧正によつて、申預けられたる西山の善慧坊、岡崎よりの我が聖人とが、期せずして小松谷と相會した。時に、師の聖人は、刑罰眼前に迫まり居るにも拘らず、平然として念佛し給ふことは、常と變らない。聽て、善慧坊は膝を近く、何分今

は、斯る時節がらなれば、何卒、暫時が間念佛を稱へられず、淨土門を中止遊ばされたし、たとい御恩は念佛にても、世を教へ人を導く方便と思召して、御遠慮いたされてはと、師の御身を思ふの至り、さう申上げた。處が、汝は、經釋を見ないのかとの師の仰せ。イヤ經釋は存じて居ますが、唯々世間の機嫌を思ふばかりにと。其言未だ終らざるに、師の聖人は聲を勵まされて、仰せられる様。此源空は、たとい死刑に行はれても、いッかな變へることは出来ぬ。よしや自分の舌は八裂にされやうが、どうして念佛が止められやう。思へ、今日わが弘通する念佛の一行は、正に、これ大聖釋尊出世の本懷ではないか。十方恒沙の諸佛も、既に之を証誠し、わけて善導大師は、本願の念佛を以て、往生の最要と教へ給ふた。されば、之を行じたるによつて罪せられるとも、何んで苦しからう。驛路は聖者

○小松谷の消息……………

○小松谷の消息……………
の赴くところ、調所は權化の住む處である。この度流刑にあふとも
決して憂ふるには及ばぬ。悲しむにも足らぬ。其時こそ邊鄙の衆生
を救ひ、念佛の聲さへ聞いたことのない人々に、如來の慈光を被ら
しむると云ふは、誠に、莫大の御利益だから、却つて、それは悦ぶ
べきであるぞや。とあとは念佛の聲のみ常住の靈光は燦として十方
を照し、唯一の大道は歴として、三世を貫く。犯すべからざる師の
威嚴に打たれて、善慧坊は云ふまでもなく、座中の者は皆共に、感
涙に咽ぶ外はなき折しも、會釋もかろく入り來れる人は、誰あらう
かの九條關白であつた。公は語るも涙ながらに、せめては近き所に
も、及ぶ限りの力は盡した甲斐も水の泡となつて、師聖人は土佐に、
善信坊は越後にと、次の言葉もよう言はで、涙に聲も曇つて了つた。
宜旨中に、藤井元彦とあるは、師法然聖人で、同じく善信とは、即

ちわが聖人のことにて、共に僧儀を改められた俗名である。高齡な
る七十五歳の御躬が、遠く南海の波に漂はねばならぬ次第を、さく
わが聖人は、御自分のこともうち忘れて、ひたすら御師匠の御身の
上を、悲しむのであつた。
別れに臨みて師の聖人は、「善信の御房よ、愚老はこれより、如來の
御意に従つて、南海の衆生を救ふであらう。御房は、彌陀の弘誓に
よつて、北陸の群生をもらし給ふなよ。」とて互に手を執りて、唯涙
に咽び給ふのみであつた。この師弟の情のこまやかなるに、善慧坊
は、怒じい山門にあづけられたる身の不運をかこち、九條殿下にと
つては、親と子に、一時に見捨てられたやうに感じて、一入に別後
の淋しさ迄思ひやられ、悲嘆の涙に、念佛の聲もうるはうた。

○配所に赴き給ふ……………

五。配所に赴き給ふ。

○配所に赴き給ふ……

わが聖人は、己に善縛房らと等しく、死罪に決してゐた。處に、その評定の議場に、後ればせて來られた六角前中納言親經卿が、かくと聞くや、驚きかつ怒りを含んで、先づ其理由を尋問するのであつた。が、その議決の趣きは何事であらう。唯善信の御房は年も若く、其の上、肉食妻帯と云ふ隋落僧、つまり、佛法の規則破りである、だから、這魔者を生してとくと、後日に至つて又今日以上の大事件を起さぬとも限らない、で今の中に、むしろ無い者にした方がと、實は、將來のためだから。と斯う答へる中納言卿は、嚴然と容を正して、さては、甚だ心得難い其の評定かな。たとひ、彼が肉食妻帯すればとて、死刑に處するとは、近頃もつて無法の評定と申すもの、全く、斯様くの次第だから、其評定は取消

して貰いたい。と此反對論によつて、遂に、一等を減じて流罪と決したのである。かくて、二月二十八日附を以て左遷の大命が下つた。人皇八十三代上御門天皇、承元元年三月十六日の朝となるや、月輪禪閣兼實公は、わが聖人を御見立てすべく、岡崎に着いた時には、早くも追立の官吏が、流人おそしと待ちかまへて居る所である。禪閣は車を出で、急ぎ奥に通られると、わが聖人は、朽葉色の直垂に梨打烏帽子を被られ、今しも、玄關に成らせられんとする折だが、禪閣の御見立に接したので、復び、座に直りて一禮をされる。扱て殿下、御師匠は如何に渡らせ給ふやと、御尋ね申すに、只今諸山の碩徳方と、御名残りの最中であるとのみで、禪閣の聲は涙に消されて了つた。わが聖人も、亦せき來る涙を袖にかくしつゝ、ではすまないけれど、御師の御立ちを見るに忍びぬから、一足御先きに

○配所に赴き給ふ……

○配所に赴き給ふ……

門出致さうと、御起ちなされ様とするに、今年四才の御長男は、父さんは、何處へお出なされるのと、優しく兩手を支へるではないか。禪閣は思はず膝を進め、愛らしい孫君の頭を撫でながら、落つる涙を押拭ひく。オ、範意か、此頃はおとなしくなりつるよと、抱き上げ給ふ状を、御覽なされたる聖人は、又しても悲しさを餘りて、禪閣に對はれ、實は其子がか弱い生れである……私が居なくなつたからとて、母は居るので心配は不要ぬやうだが、何卒、子供の事はよろしくと云ふ、御頼みの御言葉に、禪閣も力を入れ、夫は申される迄もなく、私の方で達者に育てあげ、年頃にもならば、手習學問も致させるであらう夢々心煩はし給ふなど。流石は、恩愛の情こまやかである。わが聖人は癒てお氣を取直されて、去らば殿下、御健全にましく御念佛御喜び遊ばされたしと、御別れの御一言。兼

實公も改まり、越路にても、殊に國府は雪深き邊地と聞くからは、一入に、配所の艱難も思ひやられるけれど、曾て小松谷に於て、御房が決心の程は承てゐるので、私も大變心大夫に思つてゐる。尙ほ妻子の事は必ず御案召さるな。私が引受けて御世話致すからと。深切も御力添への語である。拆から戸外に當りて、藤井善信殿、疾く御立ちあれと、呼立てる聲。わが聖人は、徐々と表に出させられるに。名残りを惜み、御見送りすべく庭に集ひたる道俗は、何人も聲を放つて泣きたてる。聖人は御念佛諸共に、用意の張輿に御乗り遊ばされた。笈を負へる性信房、鐵杖を提げて淨寛房は、輿を護るべく左右に付添ひ、月輪禪閣より差向けられたる伊賀守貞固と、朝倉主膳の二人は、騎馬にて前後に従ふた。一步また一步、遠ざかり行く一行を伸上りつゝ、お見送り申してゐた玉日の方は、ついに

○配所に赴き給ふ……

○愚禿……
は其所に打倒れた、道中に十三日間を費された聖人は、三月二十八日、越後國頸城郡國府に御着あつて、一先、代官萩原民部少輔年景の館に入らせられ、翌月七日、國分寺の禪居に移られ、更に、小丸山と云ふ地に草庵を結ばれて、此所に流浪の身を留め給ふた。

第六章 東北

一。愚禿

師聖人の「貴房は彌陀の弘誓によつて、必ず北陸の群生をもらし給ふな。」との御言葉を、常に忘れ給はぬわが聖人は、勅勸の御身をも忘られて、ひたすら淨土の道を傳へんものと、西佛、普濟の兩人を勵まして、開教のことに努力せられた。一日、わが聖人は二人の御弟子を召して仰せあるよう。自分は朝譚を蒙つて、既に、僧儀を改められ俗名を賜はつて居るから、全くの僧でないが、日々

勤める行は、即ち是れ沙門の行であるから、全くの俗人でもない。で今日よりは、この非僧非俗の一物を稱して、愚禿親鸞と呼ぶことに致さう。斯くと聞きたる淨寛坊は、喜悅のあまり、思はず膝を乗り出して、親鸞聖人。あゝ親鸞聖人とは、實に好きも名を撰ばれ給ひしかな。實に御師匠は、印度に於ける天親菩薩、唐土に於ける曇鸞大師とを兼ねて、此の日域に、弘願他力の大道を開闢し給ふ權者に在せば、誠に相應の御名前であると、心から喜んだ。わが聖人は、否なとよ淨寛の御坊よ。さうではないが、自分は、只賢者の信を聞いて愚禿が心を顯はすばかりだ。賢者の信は内を賢にして外は愚であるが、愚禿の心は、内を愚にして外は賢である。偏に他力金剛の信心を以て、即得往生の位地に到るこそ、無上の仕合せであると、呵々として手を拍られた。大きな眼を細うして、破顔微笑したる淨

○佛天のお計ひ……

○佛天のお計ひ……………
寛坊は無論、同座にゐらせたる御裏方迄、はからずも、一生之間能
莊嚴の靈感に惹き起られて爲めに、一座は寂として黙々の間に、無
限の靈現に充された。「若し我れ配所に趣かずんば、何によつてか邊
鄙の群類を化せん。」との御自覺は、遂に、わが聖人をして、撓まず
屈せず、道を各所に傳へ給ふに至つた次第も亦、實こそ其の故なきに
あらずである。されば、遠近の道俗其化を蒙らんと、遙に、聖人の
草庵に詣で、求道の誠をいたす者は甚だ多数なりしも理である。實
にや、誠の雨のそゞとところ、其所には終に信心の花が咲かすには
居らぬ。かくて此所に謫居の庵を結ばれて程なく、第二の吉水を現
じて、清き御法の流れは流れながれて、漸く、北陸關東の多方面に
まで、溢出し初めたのだ。

二。佛天のお計ひ。

建歷元年（十一月十七日）、流罪勅免の命が下つた。
茲に於てか、わが聖人は何はあいても、先づ、師聖人の安否を訪ふ
ことに決したが、如何にせん、時は嚴冬雪深くして、越路も信濃路
も通行は全く絶えてゐる。わが聖人は是非なくも、五十余日を空し
く過され、明けて、二年の春を迎へた。處で、信濃の方面は少しく
路が開けたと傳へられたのが、其月の二十八日であつた。でわが聖
人は、早速其日に雪の國府を出立せられて、信濃路に志されたまふ
た。されど世は無常にして、生滅定めなき悲しさには、上洛を急が
るゝ聖人、端なくも途中に於て、師聖人御遷化の確報に接し給ふ。
あゝ浮世なるかな、一別以來、こゝに五年の春秋を存へて、さしも
に再會を希ひし甲斐ありて、會ふべき時は來ながらも、生憎雪にへ

○佛天のお計ひ……………

だてられ、空しく其機を逸せしかと、無念の涙に咽ばせられたわが
聖人は、漸うく涙の静まるにつれて、「貴房は彌陀の弘誓によつて、
必ず北陸の群生を漏らし給ふな。」と仰せ下つた大師聖人の御言を思
ひ浮べて、あゝ自分は、漏さず北陸の群生を救ひ得たであらふか。
思へば、道を埋めた雪や、先達し給ふ師聖人の御遷化は、或は、か
の師命をはたすべく、自分をして、北陸の野に留めしめんための佛
天のお計ひではあるまいか。あゝ、「北陸の群生を漏すな」との御言
葉こそ、實に、自分への御遺訓となつたか。此上は、唯一期の別離
を悲んで、徒らに、歎息すべき時ではない。約束あらば今にも、師
のみ後を慕ふべき身かも知れぬ。いで、其迄は如來の愛感と故聖人
の保護の下に、之より直に、利他の大行を履まんものと、茲に、悠
然意を決し給ふて、力の限り師命を果たすべく、其儘足を返し給ふ

た。同年五月中旬のことである。越後の國頸城郡柿崎の里にて、富
豪小島左衛門の軒下に、しぶく宿をかりかね給ひては、主人の無
情を救ひ、主婦の請を容れては、すでに河を渡りながらも、六字の
尊號を書き與へるなど、世に云ふ（川越の名號とはこれだ。）終には、
越後七不思議の奇蹟を残すに至つた。

三。石の枕

越後、越中、信濃、上野、下野、下總の開教に、五ヶ年
の星霜を費やし給ひしわが聖人は、建暦三年、更に常陸の國に入り、
草庵を稲田の郷に結び給ひ、此所を根據として、特に、國內の行化
に勉めらるゝ事となつた。建保元年の春、御裏方玉日の姫は、公然
稲田の禪房に入つて、聖人に給仕したまふ。時に、わが聖人は御年

正に四十一才にして、姫君は二十八才。同じく五年の冬、一日、わが聖人は稻田を出で、遠く北方久志郡を教化しつゝ、今しも大門の郷に入らせられたる頃、早くも日暮に迫り、突然、加ふるに大雪は降り出して、勝手分ぬ旅の空、見渡す限りは忽ちに自妙と打變るので、不案内の夜路を進みかねて御思案のありから、此所に一軒の大家と思ほしき家あるを幸ひ、一夜の宿を需めることとして、先づ性信房が行つて、今宵一夜の無心を願ふた。此家の主人は聲高々と手前方は宿屋ではない、のみならず自分は坊主嫌だ。坊の半聞くだけでも頭痛がする、御前共に食はせる程ならば、犬猫にでも食はせたがましたなど、言語に絶した挨拶に、驚きと、腹立たしき心とをあさへて性信房は出て來た。そして、然々の由を聖人に申し上げると、あゝ性信御房よ、克くこそ堪忍て來られた、これも信の餘徳で

○石の枕

あらう。而し、かゝる邪見な者こそ如來の御見當であるから、夫を漏しては親鸞の身が立たぬで、も一度私が行つて頼んでみようよと、弟子共の留むるのも聞き入れ玉はず、自ら進んで此の情け知らぬ家に入らせられた。主人は、聖人を見るや聲あらあらしく、こん畜生聞き分けもなく又うせたか、餘りひつこいと棒を食はせるぞ、と怒鳴り立てる。わが聖人は、かやうなる暴言も尙ほ甘しと、靜かに進み寄り、いと町寧に會釋して、切に一宿を納屋の端なり、庭の角なり、如何なる所でもかまはぬから、平に一夜の御情けをと頼んだが、荒れすさんだ彼の心には、馬の耳に風も同様で、何の感じもあらばこそ。流石のわが聖人も、つくすに言葉なければ、止むなく表に立出でたまふ。此時すでに四邊は暗く、今更らせん術もなく、いざ、石を枕雪を褥に、この軒下に一夜を明さんものと、其所に座し給ひ

○石の枕

て、從者を相手に、大悲深重の御苦勞を物語られる。夜の更なるにつれて、雪はいよ／＼ふりに降る、風はますます／＼強さを増して、吹雪は頻りに三人の頬を襲ふて來る。西佛、普濟は西方より、軀を以て風を防ぐやら、衣の袖で雪を拂ふやら、師匠のお身の上を、一途に氣づかいてゐる。わが聖人は、兩人の御弟子を制しながら、そんな私のことと心配するには及ばぬ。思へば、阿彌陀如來が五劫永劫の御苦勞も、此の親鸞一人を助けんための御修行であつたが、今は其御苦勞の萬々一を思ひ知らせて頂くことで、今宵一夜の假寢は、我が身にとつては過分な仕合せ、實に應しい雪の夜であると、お稱名の聲も勇ましい。此家の主人は、日野左門尉頼秋とて、もとは江州日野の産で、日野左近將監頼秀の後裔なるも、當時、不遇にして各所に流浪したるはて、此地に住して居るのである。處が、身の浪

々とも性に性質も荒れ、心の辛苦と共に情緒も亂れて、由ある武士の末孫たる頼秋とは思へぬほど、慳貪邪見な人物とかはつたのだ。静かなる夜半に稱ふる念佛は、戸障子を透して、無情なる左衛門が耳を破つた。不思議や聖人の唱へたまふ念佛の一聲々々が、頼秋の心に泌み初めて、彼が曇りきつてゐる胸の暗も、夜の更くると共に漸う牙え渡つたのだ。かくて、自分の心の覺めるにつれて、氣とがめのするの、最初に吐いた暴言である、夫と同時に、門前の雪に埋れて風にさらされて居る痛ましい、師弟の状態を想はぬはけにゆかなかつた。無情な彼も、遂には寢床より轉び出で、ひそかに戸外を伺ふて一層をどろくより外仕方がなかつたと云ふのは、聖人の口より出づる稱名の一々が、まがう方なき光明であつたからである。而して、彼は此の光に照さるゝや、忽ち、慚愧と懺悔とに瀧なす涙

○石の枕

を絞^{しぼ}りつゝ、油^{あぶら}の汗^{あせ}にぬれたる軀^{からだ}を地^ちに伏^ふせて、どうか御許^{おんごころ}しを、何卒^{なにとぞ}御助^{ごすけ}けをと、終^{つひ}に、屋内^{やうち}に請^{まを}じて道^{みち}を求^{もと}むるに至^{いた}つた。わが聖^{せい}人は、終^{つひ}夜^よ、晝^{ひる}の疲^{つか}れも打^{うち}忘れ玉^{たま}ひて、大^{おほ}悲^ひの救^{すく}済^すを御^ご教^{きょう}化^{くわ}遊^{あそ}ばされたので、彼^{かれ}は立^たちどころに信^{しん}心^{しん}開^か發^{はつ}して、さしも邪^じ見^{けん}なりし頼^{たの}秋^{あき}も、茲^{こゝ}に、御^ご弟^{てい}子^し道^{みち}圓^{えん}房^{ぼう}と、一^{いっ}變^{へん}したのである。

○内外多難……

四。内外多難。

承^{しょう}久^{きゅう}の亂^{らん}を以^{もつ}て、世^よに聞^きえ高^{たか}き承^{しょう}久^{きゅう}三^{さん}年^{ねん}は、彼^{かれ}の義^ぎ時^{とき}が畏^{かしこ}くも、鳥^{とり}羽^は上^{じやう}皇^{わう}を隱^い岐^ぎに、土^{つち}御^ご門^{もん}上^{じやう}皇^{わう}を土^と佐^さに、順^{じゆん}德^{とく}天^{てん}皇^{わう}を佐^さ渡^{わた}に遷^{うつ}し奉^{たてまつ}り、なほ仲^{ちゆう}恭^{きやう}天^{てん}皇^{わう}を廢^{はい}しまつりて、後^ご堀^{ぼり}川^{がわ}帝^{てい}を御^ご位^ゐに進^{すす}め奉^{たてまつ}るなど、政^{せい}界^{かい}に事^{こと}多^{おほ}かりしが、教^{きやう}界^{かい}も亦^{また}こと多^{おほ}くして、わが聖^{せい}人^{にん}の御^ご長^{ちやう}男^{なん}、大^{だい}貳^じ阿^あ闍^{あつ}梨^り範^{はん}意^いの君^{きみ}は、京^{きやう}都^との岡^{おか}崎^{さき}に於^おて、行^{ぎやう}年^{ねん}十^{じゅう}七^{しち}の

あた^らら^ら蒼^{そう}の身^みを散^ちらされ、一^{いっ}方^{ぽう}此^{こゝ}方^{かた}にては、危^{あや}くも、嫉^{ねた}みの矢^や先^{さき}きにかゝらんとする板^{いた}敷^{じき}山^{さん}の難^{なん}があつた。板^{いた}敷^{じき}山^{さん}とは、稻^{いな}田^だより鹿^か鳥^{じやう}行^{ぎやう}方^{かた}地^ち方^{かた}へ^への通^{つう}路^ろでめるから、わが聖^{せい}人^{にん}も、常^{つね}に此^{こゝ}所^{ところ}を往^い復^{ふく}し給^{たま}ふのだ。これより先^{さき}き、常^{つね}陸^{りく}の國^{くに}中^{ちゆう}で修^{しゆ}験^{げん}者^{しゃ}の司^{つかさど}をしてゐる者^{もの}に、播^は磨^まの辨^{べん}圓^{えん}と云^いふがあつた。彼^{かれ}は豊^{ゆん}後^ごの^{ひと}にして、幼^{ちゆう}より聖^{せい}護^ご院^{いん}の門^{もん}に入^いりしが、長^{ちやう}じて智^ち德^{とく}の譽^ほれ高^{たか}く、常^{つね}陸^{りく}の國^{くに}司^{つかさど}佐^さ竹^{ちやく}末^{まつ}賢^{けん}氏^し、之^{これ}を聞きて招^{まね}聘^{へい}するなど、當^{たう}時^じに在^あつては、役^{やく}小^{せう}角^{かく}が再^{さい}來^{らい}かとまでもて囃^はされ、多^{おほ}くの人心^{にんしん}を身^み一^{いっ}つに集^{あつ}めてゐた。此^{こゝ}時^{とき}にあたりてわが聖^{せい}人は、稻^{いな}田^だの禪^{ぜん}房^{ぼう}に在^ありて、日^{にち}夜^や教^{きやう}化^{くわ}に餘^よ念^{ねん}なかりしたため、何^い時^{とき}とはなく、辨^{べん}圓^{えん}の加^か持^ぢにあづからんとするもの、其^{その}數^{すう}を減^{げん}ずると共に、わが聖^{せい}人^{にん}の草^{そう}庵^{あん}に群^{ぐん}集^{じふ}するの輩^{やから}、自^{みづか}ら昨^{きのう}日^{にち}に増^まし、國^{くに}内^{ない}の人心^{にんしん}は一^{いっ}轉^{てん}して、本^{ほん}願^{げん}他^た力^{りき}の道^{みち}を慕^{した}ふようになつて來^きた。茲^{こゝ}に於^おてか辨^{べん}圓^{えん}は

○内外多難……

忽ち怨みの眼を以て、罪なきわが聖人をうかじひ、今に無き者にいたさんと、色々工夫をこらすに至つた。而して、先づ第一着として彼は、板敷山の絶頂に、呪咀調伏の護摩壇をかまへ一七日に一萬度の護摩を焚き、唯一心に、わが聖人を祈り殺さんと謀つた。斯て後彼は、わが聖人の容子如何と伺ふに、更に我が行力の叶はないばかりでなく、聖人は益々元氣よく、日毎に此山を往返して、行化いよ盛なる有様である。かくと知りたる彼は、怒氣天をつくの勢で、オノレ此の積憤、この儘でをくべきと、やがて國內の宗族部下數十人を召集し、此の板敷の山中にて、親鸞の肉を屠つて仕舞はんものと、恐しき企てに及んだ。然るに、不思議なることには、彼等が放つ弓矢の下、各々得手の武器をかざしてねらう、危険千萬なる其の間をも、何とも思召さず、念佛の聲諸共に、例の如くお通ひなさる

が、而も、何たるお障りもあらせられぬ。かくして、度々相待つと雖も、常に其機を失して、望みを達する時が無い。最早以上は是非に及べぬから、直接、稻田の草庵に行きたゞ一呑みに睨み付けて降参すに加じと、草庵を指して馳せつけた。平等大悲の慈愛に充たさせ給ふわが聖人に、敵味方と差別のお考へあらう筈もなく、訪ふ聲のあるに應じて、直ちにいで逢ひ給ふに、たゞ一打ちにと力んで居た辨圓は、一見、聖人を拜するなり、今迄全身に満ちみちてゐた害心は、忽らくだけて、初めて、我身の卑しく少く愚かなりしに戦慄して、あゝ實に自分は、かくも貴き聖人を害せんと、今日まで種々なる手段をつくして、恐るべき罪惡を犯したのは、何たる了簡違いであつたらうと、後悔の涙は止めどもなく、流石傲氣の彼ながら、男泣きに泣きつゝ、大地にひれ伏して了つた。がやゝ時ありて、

○内外多難

彼はありのまゝに、日頃の宿念を殘るところなく白狀した。時にわが聖人は、彼が自白を聞き給ふも更に、驚ける様もあらせられず、静づくくと大悲の道をお諭しなされる。念佛の福音に接したる彼はたちどころに弓箭を切り、刀杖を捨て、頭巾もとり去り、柿色の衣を改めて、目出度く念佛の信者となつたと云ふ。二十四輩の第十九常陸國那阿郡松原上宮寺の開基、明法房證信とは、即ち辨圓が後身である。後年、わが聖人を供奉して、かの想出深き板敷山に差しかゝりしに、自ら、彼が感慨は一入切にして

山も山道も昔にかはらねど

變りはてたるわが心かな。

と、一首の歌を詠んだのだ。

五。六軸の寶典。

わが聖人の化益は、弘く、關東北越の諸國に及んで、上下道俗の歸依するもの、實に、數へきれぬ程である。曾つて、救世菩薩の告命ありし靈夢が、今は現實となりて、己が家庭の上に味ひ給ふ聖人は、此の時機相應の本願を、尊ばずには得堪えられなかつたであらう。茲年、元仁元年は、人皇八十六代後堀川天皇の聖代で、わが聖人は正に五十有二歳にして、當時、十三歳の昌姬を頭に、明信(十善鸞)(八有房)(六嵯峨姬)(四なほ彌姬)の二歳を末として、花の如き愛兒にまもられて居た。涅槃に急がれたる範意の外、六人の母であつた玉日の姫は、家にあつては子女の養育に務められ、世に對つては、夫が傳道の助けとなり、自らは女人成佛の手本を示され、妻として母としての善美を盡されるので、家庭は何時も暖き和氣に満ち

てゐた、斯様にして、往生得脱の靈府たる草庵は、其まゝが現に道徳の模範となつてゐたのだ。かくて、信心爲本の真諦と、王法爲本の俗諦と、兩輪雙翼の國家的新真宗教は、旭日の輝く如く、隆々として其靈光を放つに至つた。茲に於てかわが聖人は、國內の布教も稍思ふように運び、法燈を繼ぐべき子孫も既に數多く、衣鉢を傳ふべき門弟も亦、到る所に殖えたれば、今や心にかゝるは、後進者の引導を思召すのみである。惟ふに、當時の教界にあつては、淨土教の流義（一念義、多念義、諸行本願義、西山流、鎮西流）は區々に分れ、聖道教の破釋（明慧の推邪論、公胤の淨土決疑鈔、定照の彈選釋等）は頻々として傳はり、且つ又、外教（儒者）の偏執も行はれて居ると云ふ時節である。此の時にあたりてわが聖人は、初めて淨土真宗の名目を立て、似て非なる淨土の假宗に簡び、内に於ては

元祖（法然）聖人の立て給ふ淨土は、淨土の方便假宗ではない、全く、本願真宗の教、即ち、廢立爲正の淨土真宗だと教へ、外に向つては、愚禿の勸むるところに全く私なく、近くは之を七祖に承け、遠くは、釋尊出生の本懐たる大無量壽經に依れる、二尊一致の彌陀教であると知らせ、以て、後進の行者を指導下さるゝ慈悲の結晶が終に、本典六軸の御聖教となつて、世にあらはれたのだ。見よ、其の如何を信化兩卷の序文に。
「然るに未代の道俗、近世の宗師、自性唯心に沈んで、淨土の眞證を貶し、定散の自心に迷ふて、金剛の眞信に昏し。こゝに愚禿釋の鸞、諸佛如來の眞説に信順して、論家釋家の宗義を披閱す。」廣く三經の光澤を蒙りて、殊に一心の華文をひらく。（信卷の別序）なほ、後序の文には、諸事の釋門、教に昏くして眞假の門戸を知らず。洛

○六軸の寶典……其一……

都の儒林、行に迷ふて邪正の道路を辨ふることなし。」

と。ある之によつても、御製作の思召しは、大概窺はれるだらうと思ふ。抑々、本典とは一部六卷より成るが、以下その大綱を畧述しようとするにさき立つて、題號を擧げる次の如くだ。

- 一。顯淨土眞實教文類
- 二。顯淨土眞實行文類
- 三。顯淨土眞實信文類
- 四。顯淨土眞實證文類
- 五。顯淨土眞佛土文類
- 六。顯淨土方便化身土文類

其の一

イ、眞實教と云ふは、「大無量壽經即ち是れなり。」と示されてある如く、此經は、聖道通途の格式を離れ、本地阿彌陀如來の大寂滅海に入りて、よく如來因果の功德を説き、本願爲宗、名號爲體の深旨を

あらはして、以て、私共に安樂淨土の往生を勧め給ひし、眞實の教へであるとの御指南が、この教卷を顯はされた主眼である。抑々斯經の大意に就ては、曾て日曜講話會に話したのが、鹿兒島評論社發行の「親鸞主義」(大正六新年號)に掲載されてあるから今その一節を記して置く。時機正に淳熟して、茲に初めて、番々出生の諸佛如來の正本意とする、絕對不二の眞實教が、嗜閑屈山上の會座に起つた。來會の大衆は、今日まで未だ見奉らぬ如來の尊嚴にうたれて、三千年に一度しか咲かないと云ふ、ウドンゲの花を手にした心地であつた。サテ斯會の一大事因縁をつつたのが取りも直さず大無量壽經上下二卷の法門である。で。此大經は、釋尊自身の八相の化儀を、來會の菩薩にゆづられて、御身自らは、彌陀を大寂界に入らせ給ふて、本佛の徳相を實現され、尊者阿難を對告衆として、

○六軸の寶典……其一……

○六軸の寶典……其一……
如來を世に出現遊ばされた本懷たる本願他力の一門を、説かせられたのである。先づ上卷には、彌陀成佛の因果を説き給ふた。迷へる苦界の衆生のありさまが、如來の大海にうつては、如何しても傍觀しては居堪へずに、竟いには、形を現はされて、法藏菩薩と名乗り出られ、世自在王佛の所に詣で、願を起し賢愚善惡のへだてなく、唯だ、わが願力に接するものすら、必ず、導いて安養界に往生さしてやる。若し、此わが願力を信ずる者が空しくなるやうならば、我は正覺をとらないと云ふ、大なる誓ひを立てさせられたのだ。そして、此誓願を思ひ通りに成就させねば止まないとの大決心よりして、遂には永劫に亘りて、積功累徳の御修業を遊ばされた。かくて、永劫の修業に依て五劫の大願を成就し、力願相符ふて、此に、自在神力の阿彌陀佛とならせ給ひ、正覺大音と、南无阿彌陀佛の御名を

十方に示し、あらゆる衆生をして之を聞かしめ、是を信ぜしめたまふたが、所謂、彌陀成佛の因果だ。夫より下卷に來つて、衆生往生の因果を説かせらるゝに當りて、最初に一切衆生が、齊しく往生する因は、其名號を聞いて信ずる、即ち、これが報土往生の因であることを示し、次に、三輩の往生を明かされて、諸行往生の因を説き給ふた。だが、その往生の因によつて開く處の證果に、化生と胎生と、この二つの相違があつて、唯一如來の救ひに一任して往生するものは、即ち唯一平等の佛果を得て、自由自在に大活動が出来、信罪福の心に引かれて善本を修習する自力往生の行者は、不見聞三寶の胎生を招いて、自ら、其非を知つて悔責する迄は、本佛彌陀と同様な活動は出来ない、詳かに、御説き下されてある。之が、即ち衆生往生の因果だ、如斯、成佛と往生との因果の道理より成立した

○六軸の寶典……其一……

○六軸の寶典……其一……

る眞實教が、彌陀法であると説かれた釋尊、御自身の立場としては是を説き示すのが、自分の本懐であると云ふ御意見を述べさせられた。さうして、此法を信ずる者は明信佛智の人であると、讚るに爲得大利の言を下し、而も無上功德を具足する者と嘆美され、之に反する者は、一に不了佛智の疑惑者であるぞといましめ、爲失大利の者と貶し、之が、宿世に智慧を磨かず功德を修習せない、謂ふ所の迷兒だと嘆かせられ、次に、五善を修めて五惡を避けよ、而して、與へられたる大道に背かぬように致せと、御懇切な御諭しを下された。已上が一經の内容に於ける次第前後の梗概である。で、これから、其始終初後をひさくるめて、要領を窺ふことにする。抑々、此經の大意は、わが聖人の御指圖によると、二尊（釋迦、彌陀）一致の御旨を示し給ふにある、と定むべきである。彌陀如來が凡小を哀

みて（因位の發願）大願大行の功德のありたけを、一句の名號（果上の選施）にあさめて、諸々の惱める衆生に與へ下されて、苦海より救ひあげようと思召す、やるせない大慈大悲の喚聲が、この大無量壽經である。釋尊は、此法（彌陀法を云ふ）を説いて我が法となし、以て、群萌を拯ひ、恵ひに眞實の利を以てせんと欲すと、説かせられた。看よ、釋尊が一切衆生に恵み與へんとする眞實の利は、即ち、本佛彌陀の選んで施さんとする功德の、御實ではないか。されば、此岸から發遣する御聲も、彼岸から招授下される御聲も、つまり、南无阿彌陀佛の大行より外には、施し、恵み與へて、救ひとるべき道のないことを知らしめ給ひ、そして、私共のたよらねばならぬ唯一の力と、光とを指示されたのが、今經一部の要領である。かく、一經の法義は彌陀法であるから、其所説の法から云へば、一

○六軸の寶典……其一……

經悉くが彌陀教であると同時に、また、能説の教主について云へば、一經のすべてが、釋迦教であると云はねばならぬ。けれども、釋迦の發遣も彌陀の招喚も、其ものには二つなく、彌陀の選施は釋尊によりて顯はされ、釋尊の哀愍は本佛の願力に依つて成立する。所謂二尊一致の法義で、この遣喚不二の極に至つて、始めて、利生の本意を達することが出来るのだ、こゝが、正しく今經の大意だ。

ロ、眞實の行と云ふは、南无阿彌陀佛の御名を指すので、全體、行には題と相とがある。行の體は法體の名號で、法體の名には、攝諸善法、具諸徳本と云ふて、衆生を無作に、自果報に進趣させる力用がある。衆生の口稱にかゝつた例から云へば、造作の相であるも、作即無作の進趣であつて、決して自心の造作ではなく、全く、法體願行の自運に外ならぬのだ。通途の上では、吾々の造作する修業が

果に向つて進趣する側を、行と云ふが、別途の上では、吾々の能行の造作が果に進趣するのではなく、私共の機に印現したる法體の願行がよく、私共を、無作に果界に進趣せしむる力用を有して居る。

で、南无阿彌陀佛を、直に妙行と云ふことが出来る。信ずるものに願行が具はる。信(南无)する能信のありだけが、法體願行のあらはれた相であるから、機よりみれば信心正因であるが法よりすればとりも直さず大行の自運で、謂はゞ私共を、南无阿彌陀佛にまゐめて往生成佛の證果に運び得る、法體大行だ。で、眞實の行と云はねばならぬとの、仰せであるが、更に、私共が受得の方に就いて云へば、信前行後の次第で、大信一たび起つて佛因圓滿する日には、稱名自ら相續して、佛恩を感荷せずにはすまぬやうになる。是が所謂「終日能行すれども、所行海を離れず」のありさまで、能行と所行

○六軸の寶典……其一……

○六軸の寶典……其一……

ホ、眞佛土と云ふは、佛身と佛土との身土不二なる妙境界を云ふので、見生の凡夫をして、能く無生の妙境界に契入せしむる所以は、一に此より起つてあることを忘れてはならぬ。扱て、この眞佛土を開きたまふ思召を伺ふに、之を前の證の卷に望めて味ふのと、又之を後の化身士の卷に望めて味ふとの、二つの意味がある。先づ初めに、前の證の卷に望めて頂くと、抑々四法圓具の、南无阿彌陀佛を受領したる我々衆生のひらく證果と云ふものは、全く、本佛彌陀の自果報に冥融するより外なき旨を、知らせ給ふ思召しが味はれる。他の言葉をもつてすると、我れらの得たる必見佛性の場處は、即ち、是れ眞佛の淨土であつて、而もその眞佛土なるものは、とりもなほさず、彌陀正覺の涅槃であるから、そのまゝが、私共衆生の所得のものであるとの、大悲を知らしめんがために、此卷を著はされた事

が伺はれる。又この卷を、第六の化身士の卷に望めて伺ふと、正しく眞假を判然と分たれ、入るものをして、一見その道に惑はぬやう、權實眞假の分際は明了に、著はされたのだと頂かれる。眞佛土卷に「眞假を知らざるに由つて如來の廣大なる恩徳を迷失す。茲に因つて今眞佛眞土を著はす。斯れ乃ち眞宗の正意なり。」と仰せられてある。眞實の四法は、即ち正意の法であるから、前に卷を分つて之を説明し、説明し了つて、此に、其本源たる眞佛土に攝つてしまふ次第を著はされ、而して、方便の四法は所廢のもの故、次に、化身士を著はして此中に略明し、其過失を詳かに示し給ふた。かく身士の體に就て、眞假を分明に判定し、眞實の四法を眞佛眞土に攝めて、以て、化身化士に簡び給ふた御意を知る時、どうして惑うて居られやう。

○六軸の寶典……其一……

へ。方便化身土と云ふは、方便の化身化土を云ふので、必竟、淺近の機の感見に應じて、身土の化現するをいふ。懈慢界とか、疑城胎宮とか、邊地とか呼ぶ名稱は、通じて、化土に名付けたものだ。

其の二。

教、行、信、證と此の初めの四卷には、俱に同じく、淨土眞實の四字を冠らして明され、後の一卷には、眞實の反對なる方便の二字を冠らして、示し下されてあるが、此には、如何なる思召しが含まれてゐるであらうか。抑々淨土と云ふは、外に向つて聖道教に簡ぶ處の名だ。最も聖道教の上でも、十方隨願往生經の如きは、往生淨土の説がある、けれども、彼に談ずる往生なるものは、謂ふ所の「隨其心淨即佛土淨」「三賢十聖住果報、唯佛一人居淨土」とか云ふ

やうな淨土で、全く、衆生自心の所變であつた、その自果報に入つて住する往生だから、夫等の聖道教に簡ばんために、淨土の二字を冠らしたのである。又、眞實の二字は、要門（第十九卷）の四法及び、眞門（第二十卷）の四法に對する簡別の名である。弘願（第八願）如實の機は、自力心を投捨て、佛智の他力に打任せらるから、佛自果報の光壽海（眞佛土）に往生するのである。處が之に反して要門、眞門の行者は、自心の善根に泥んで、佛智の不思議を疑惑するところから、邊地懈慢、疑城胎宮に往生して、千差萬別の果を得る、ではを、方便と名付くるのだ。かやうな方便の四法に簡んで、弘願他力の四法は、全く眞實であるぞと、明了に、其分際を指示されたのである。

其の三。

扱御本典の立題には、一に三法、二に四法、三に六法と、かう三例になつて、前後の總題は、教行證の四法立題であるが、教卷の終り、證卷の結びには、教行信證の四法立題になつてゐる。而して後卷の別列に於ては、具に六法をあげてある。
イ、三法立題。本典前後の總題に、教行證の三法を以て題とし給ふたは、外、常途の教相に對して濁末の興廢を示し、内、行中に信を攝めて、他力の宗義を明かに知らしめたまふ思召してある。元照義疏に、「大覺世尊一代の教、大小、異ありといへども、教理行果を出でず。教は理を顯はす、理によつて行を起し、行によつて果を尅す。」と云つてある。常途に於ては、必ず、行によつて尅果を期するから、且らく、彼に準じて三法の題を立て、もつて念佛と諸善との、二行

相對廢立の教義あることを示し王ふ。然し、單に常途の教相に對するのみではなく、また内に向つては、利他圓滿の所行法體に第十八願の大信を攝めて、斯信また法體大行の回向なる旨を、顯はされるのである。故は如何と云ふに、抑々、彼が立つる行證直接の法義に對して、此に行證（三法立題）直接の名を示し給ふたは、之全く、即是其行の特用あることを、知らして下さる爲めに外ならぬ。今これを、略典顯行の下に就て窺ふに、その初めに、「利他圓滿之大行也。」と所行法體を標し、さうして、其の行の下には、直ちに、第十八願と第十七願とを連引し、次の淨信の下に至つて、第十八願を引かなかつた處は、即ち、行に信を攝めて以て、法體大行のよく衆生をして、能信能行せしむる力用あることの、お示しだと知り得る。私共の能信能行が、全く、法體所行の回向なる趣きを彰すには、三法門

○六軸の寶典……其三……

によつてみるが、最も適義であるからである。もとより、聖道教の三法は衆生の自心を體とする。で主因は、正しく、行にあるは勿論だが、淨土教の三法は、佛の願心を體とするから、名は彼と同ずるも、その體は天淵の別がある。私共の信、行と云ふものは、取りも直さず、法體我名が煩惱の泥中に活躍する、佛陀の生命であるのだ。だから、私共の能信能行を法體我名に攝めて、所謂、攝末歸本して行證直接の三法立題をあげ、以て、他力教の全相を知らしめ給ふた。世には、佛號が佛果を開くか、と難ずる人もあるが、然し、此等の説は意に介するには餘りに價値がない。要するに、彼の眞門の信心の如きは、全く、機執を脱却することが出来ぬから、その信は、とても法體我名の中には攝められない。が、弘願他力の信心は、名義の如く信受したる信心ゆへ、そのまゝ能く法體我名の中に攝めるこ

とが出来来る。我名法體の中に、よく攝め得らるゝ信心でない、名號の全體を全領することは難い、が、名號を全領したる信心その物なら、其儘名號にさめらるゝから始めて、「彌陀をたのめば、南无阿彌陀佛の主になるなり。」と云はれる。此主が證に直接する法義である。

ロ、四法立題。本題は、信心爲本の宗義を、詳かに示さんがために行を開いて信を立て、教行信證と云へる一段の名目を掲げて、常途に例なき一宗の規模を定められたのだ。六要鈔に、「安心の巻を要須となす、故に此別序あり。」と仰せられて別序を加へ、そして、信巻を別開せられた思召しは、第十八願の眞面目を詳かにして、信心成就の旨を了解せしめんと、御意に外ならない。

第十八願には、三信と十念との二つあれども、十念の行は、能所不

○六軸の寶典……其三……

○六輪の寶典……其三……

二の眞實行だから、之を、行卷の所行位に引上げて明かし、信卷には、唯信の一法を明して、直ちに、證卷に接する信證直接の法門を開かれ、信と證との中間に於て、更に、行者の行の見つべきものなき、他力攝取の極致を顯はされたのが、信の卷の特典である。三法門によつて、法體大行の運用を知らしめ給ふたわが聖人は、こゝに信證直接の法門に顯はされて、機の修入は、たゞ信する一念によつて、涅槃の眞因の満足する、唯心正因の大道を指示し、以て、絶待他力の信念の廣大なる所以を述べたまひ、暗に、自力修因の行信の似て非なる、眞假の分際を教へられたのである。

ハ、第五卷に眞佛土を明されたは、往生即成佛の法義を詳説されて法界攝化の大本、往生淨土の根源を、明示される思召して、汝より出でたるものは汝に歸る、彌陀自證の眞佛土より緣起したる、眞實

の四法（教、行、信、證）は、我々衆生を引いて其本源たる、彌陀の果海に契入せしめる、力用あること知らしめんためだ。「故に知んぬ、安樂佛國に到つて、即ち必ず佛性を顯はす。」此の謂に外ならぬ。次に、化身土卷を明し給ふたは、全く、廢立の法義を詳かに示して、權實眞假の分際を知らしめ給ふのである。世には偽にして、眞をみたすものがある。例へば、偽眞を見誤つて、眞の信仰と認めらるが如き相違が、無いとも限らぬので、わが聖人は其塵非を簡ひ捨てようばかりに、この一卷を明されたのだ。稻稗の苗の時よりも、事ゝ實る上において見分け易いやうに、若し誤りて、隨他の方便願に止り、眞實の四法に契はざる僞信の行者は、自ら招く、化土胎生邊地の咎めにあふことを示し、その似て非なる趣きを知らしめ、以て、其稗なる結果を悔ぬやうに、眞假廢立の意を詳かに示され

○六輪の寶典……其三……

(第二、二相四法圖解)



第二圖を、二相四法の法門と云ふ。教卷の初めに、總じて本典の綱紀を要する中に、往相と還相との二法門を示され、而して、各卷の所明に至つては、四法門の法義を別顯し給ふてある。第二十二願の還相回向をば、第十一願の證の卷に攝めて、還相の卷を別開なされぬのは、一つは、機趣の趣入の正所明とし給ふ思召しと、もう一つは孤調自度の證でないことを知らしめようと云ふ、其御深切からしてかくは、標釋互顯の意見をとつて御明し下されたのだ。機の趣入た

る、もとより本佛の攝化に依る。で、先づ初めに、二相門を標し給ふた。二相は、本佛の回向であるから、即ち、攝化門の義を存して居る。四法は、往生の因果を所明するから、正しく趣入門の義だ。若し、攝化門の法義を以て本典を統ぶる時は往相還相の二種は、即ち、是れ所回向物であつて、佛の衆生に回向し給ふ化攝の相と見へる。二種の回向は、とりもなほさず攝化の始終にして、衆生を淨土に往生せしめ給ふは、穢國に還來させて普く、無邊の衆生を化度せしめんがためである。夫で、只淨土に往生するのみでは、大悲の正意は満足せないで、普く、生死海をつくして、始めて、大悲の佛意が満足する。是則、第二十二願を以て、往生の因果に對峙して、還相回向を立つる所以である。が、四法門(趣入)にすはつて一部を盡す時は、往生の因果を明すと、その究竟とするのだから、還相な

○六軸の寶典……其四……

るものは、あらずと、無上涅槃の妙用に攝めて、以て彌陀の證果は、二乗の夫の如き偏空の證りではなく、大なる還相の悲用を有する、大滅度であることを顯はす法門となる。で、教卷の初めに、「謹んで淨土真宗を按ずるに、二種の回向あり。一には往相、二には還相。」と列擧した還相そのものを、證卷に至つて、初めて、之を明して往相の證果とし給ふ所は、實に、極味し飽ぬ味ひがある。さて教の分際、既に就て、一言してをく。抑々大無量壽經は、所詮の法義が、既に別途の第十八願法である。夫で能詮の言陳にも亦、別途の意味がなくはならぬ。すでに、能詮の言教が別途であるから、能く、別途の所詮を顯はすことが出来る。今是を、第十七願の上に就て窺ふに能讀所讀の二つがあつて、咨嗟稱は能讀であるから、教の能讀にあたり、所讀は我名だから、所詮の法義である。釋尊、已に第十七願

力に動されて、彌陀の大寂定に入り給ひ、釋迦御自身の八相の化儀をば來會の菩薩にゆづられて能く、本願他力の能詮を成就されたのが、大無量壽經であると云ふことは、前に述べた處だが、今は、第十七願に攝屬して圖解したのでなる。

(第三、三願真假圖解)

第十八願 || 至心信樂の願 || 正定聚の機 || 真

三願 第十九願 || 至心發願の願 || 邪定聚機雙樹林下往生

無量壽佛觀經之意也

第二十願 || 至心回向の願 || 不定聚機難思往生

阿彌陀經之意也

假

右を三願真假の法門と云ふ。抑々佛が此の真假の三願を、建立し給

○六軸の寶典……其四……

○六軸の寶典……其四……

ふた思召しは、普く、萬機を攝めたいの大慈悲に外ならない。もとより佛の大悲は、一切の衆生を平等に救ひ攝めたい御心だが、如何しようにも、所對の機が區々であつて、直入の者もないではないが、滯假の者もあるので、一樣にゆかない。かく、生熟萬差の別があるから、之を救ふ方法にも亦隨自隨他の法門を開かねば思ふ様に盡す事が出来ぬ。それで、第十八願隨自意眞實の外に、更に第十九第二十の隨他意方便の兩願を設け、さうして以て、定散自力の諸機をも救濟し、眞實の大道に歸入せしめんと、大慈大悲の餘りより、かやうに三往生の願を建立し給ふたのである。佛の御本意から云へば、凡聖善惡一切の機をして、第十八願の隨自意眞實に入らしめたい、と云ふに外ならないが、しかしながら、直に眞實の本願に入りたき機類がある。でそんな自力猶生の機を捨つるに忍びないで、眞に

同情の胸を痛められた慈愛の顯現が、ついに隨他方便の兩願（第十九第二十）を建立なされるに至つたのだ。夫で兩願を、第十八願に望むれば、暫用還廢のもので、弘願の眞實に入らしむる爲めの假願である。けれども、兩願の當位に就くときは、方便の行信によつて化士の往生を得せしむる、攝機の願に違いない。で、化身土卷の初めに兩願を標列し、三經差別門に就て、觀小二經をも擧げられてある。これ即ち行卷に「方便の行信あり」と仰せられた其ものを、此に釋顯し給ふて、眞の眞たる、假の假たる、眞假の分際を明かに知らしめる思召しだ。茲に於てわが聖人が、眞假の門戸を知らざれば廢立爲正の法義を確實ならしむる事は出来ない、主張なされた御心の程が、味はしてくる。されば、化身土卷の標擧の兩願を以て前五卷の眞實五願を全ふする、第十八願に對するときは、三經差別

○六軸の寶典……其四……

○六軸の寶典……其四……

の法義となつて、即ち三願、三機、三往生の法門、所謂要門、眞門、弘願の法門となるのである。是れ必竟、不同の機類を攝して、濟度、利生の功を全ふせんとの思召しで、假を垂れたまふ所以は、假に留める爲めではなく、眞に入らせるためだから、兩願の願底には、眞實の水が流れてをることは、分りきつて居る。で化巻の本には「方便の願を按ずるに、假あり眞あり」とあつて、十九願の當位は、方便の因果を誓ふてあるが、其願底を叩いてみると、修諸功德の雜行に永らく留めをくが、この願の眞意ではない、雜行をして、正行に轉向せしむる意がある。その深意を看破して釋顯したまふたが、わが聖人の「有假有眞」の活眼である。

かく十九二十の兩願を開説したる、觀小二經であるから、「釋迦は要門ひらきつゝ、定散諸機をこしらへて、正雜二行方便し、ひとへに

○六軸の寶典……其四……

專修をすゝめしむ。(觀經和讃)「定散自力の稱名も、果遂のちかひに歸してこそ、をしへざれども自然に、眞如の門に轉入する。(小經和讃)とのたふてある。之によつて之を觀れば、本典の所明は、前五卷は所立で、第六卷は所廢で、眞假三願は正しく廢立の根源であり、又實に、念佛往生(第十八願)の正意をあらはす、唯一の利劍だと云はねばならぬ。以上、三重の法門を六卷に詳かに明かして、教行信證文類を題せられた。惟ふに是等の法門は、すべて本佛彌陀如來の願海より出て、釋尊これを「大無量壽經」「觀無量壽經」及び「阿彌陀經」に説き給ひ、三國の七祖、即ち、龍樹、天親の二菩薩、曇鸞、道綽、善導の三大師、源信和尚、法然聖人の歴聖が、各々著述を以て之を弘通せらる。わが聖人は、それら一切の聖教を稜羅して、動かすべからざる教系を作られたのが、即ち、本典六軸の御聖教で